



TITLE:

「京都大学生涯教育学講座シニア  
キャンパス」実施報告(京都大学生  
涯教育学講座シニアキャンパス実  
施記念号)

AUTHOR(S):

前平, 泰志

---

CITATION:

前平, 泰志. 「京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス」実施報告(京  
都大学生涯教育学講座シニアキャンパス実施記念号). 京都大学生涯教  
育学・図書館情報学研究 2005, 4: 1-52

ISSUE DATE:

2005-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43852>

RIGHT:

## 「京都大学生涯教育学講座シニアキャンパス」実施報告

### 1 大学と高齢者の学び

前 平 泰 志

大学と高齢者との関係は微妙な関係である。微妙な、というのは、大学のみならず、初等教育から高等教育までの制度化された教育における教育者と被教育者の関係は、年齢によって規定されていて、教育者の年齢は常に被教育者のそれを上回ることが通例だったからである。先に生まれたものが先生というのは、その意味で理に適っているといえるのかもしれない。だが、生涯教育の観念はこの伝統的な教育者と被教育者の年齢関係を破壊してしまった。先生よりもはるかに年上の生徒や学生が出現したからである。そのとき、もうひとつの難問が立ち上がる。果たして、高齢者というカテゴリーを開き込んで、彼（彼女）らに特別な学習機会を提供することは、大学にとっても、高齢者にとっても意味のあることなのか、と。なぜなら、ことさらに中・高年者など年齢枠の制限をつけなくとも、現在の大学においては、正規の学生でなくとも、聴講生、科目等履修生、社会人枠入学者など成人や高齢者が大学で学ぶ機会はたくさんあり、これに公開講座やエクステンションなどを加えると、とりわけ高齢者への特別な配慮などむしろ反動的でないのかしらんとさえ思えてくるからである。また、大学の知は、常に最先端へと向かう知であって、すでにリタイアを始めた人々にそのような最先端の知を教えることは、何の意味があるのか。さらに、高齢者の側から言っても、たとえその最先端の知や技能を修得したとしても、残り少ない人生をこのような知や技能を活用する場はどこにあるのか、それが何の役に立つのか。高齢者の学習は、公民館かカルチャーセンターで、余暇の善用として行えばよいではないか、効果という点から言えば、高齢者はより若年者に学習の優先順位を譲るべきではないのか、などなど、さまざまな問いがたちどころに浮かび上がってくる。

このような一見単純に見えながら、しかしきちんと答えることが難しい問いに対して、部分的ではあれ、高齢者自身の言葉から知る機会を得たのは、何よりであった。それは、シニアと通称呼ばれている中・高年者を迎え、短期間とはいえ、大学生活を送ってもらうという試みが京都大学で実現した2004年3月のことだった。

本特集は、その際の研究の概要で占められている。

京都大学 大学院教育学研究科 生涯教育学講座は、株式会社ジェイティービーの受託研究費を受けて、2004年3月26日（金）から28日（日）にかけてシニアキャンパス「社会に開かれた京都大学をめざして～現在・過去・未来」を主催した。天候にも恵まれ、またマスコミ等で大きく取り上げられたのも幸いして、大きな成功を収めたと言ってよいと思われる。

これに先立つ2月に大学で記者会見を行い、マスコミを通じて参加者を応募したところ、電話による資料請求が432件に上った。往復はがきによる申し込みは340件を数え、抽選の上、35名（実際の参加者は33名）の受講者が決定された。年齢は49歳から86歳までで平均年齢は61.7歳であった。資料請求の折に応募はがきとは別に応募者のプロフィールの概要を集合的に把握するために、応募者アンケートを送付したところ、応募はがきの数を越えるアンケートが回収

された(378通)。いずれもこの催しへの関心の高さがうかがわれる数字であり、シニアキャンパス最終日に実施されたアンケートとディスカッション記録をあわせ読むと、中高年者の熱い気持ちが伝わってくる内容になっている。

そのときおこなったのは、以下の章でも示されているとおり、各先生方の講義〔1〕辻本雅史教授「江戸から見た京都大学」2〕竹内 洋教授「京都大学の隠れたカリキュラム」3〕尾池和夫総長「京都大学を語る」4〕東山紘久副学長「京都大学とカウンセラーの想い」〕の受講とグループディスカッション・インタビューであり、夕食会、学食体験、写真撮影、博物館や図書館を含む構内ミニツアー、懇親会であった。本誌の特集はこのキャンパスライフ体験を下にして行った以下のアンケート調査の結果報告であり、ディスカッションやレポートの記録の分析報告となっている。具体的には以下の調査結果が含まれている。

- ① 応募ハガキに基づく調査
- ② 電話問い合わせをしてきた希望者に対するアンケート調査
- ③ シニアキャンパス参加者に対するアンケート調査
- ④ グループディスカッションによる調査
- ⑤ レポート課題に基づく調査

無論、限られた参加者へのアンケートや聞き取り調査であり、この結果をそのまま一般化する意図はないけれども、少なくともこの研究から次のようなふたつの大きな特徴を挙げることは差し支えないと思われる。

本報告は、ひとつは、高齢者の学びに対する一般のイメージの変更を迫る内容になっている、ということである。高齢者が学ぶのは、よく言えば「余暇活用」、悪く言えば「暇つぶし」と一般に思われがちであるけれども、少なくとも今回の参加者を見る限り、そのような意図を持ったものは皆無であり、学ぶことと自己の生き方とを重ね合わせている人が極めて多かった。中高年者の学びの客観的条件(年齢、性別、階層、経験、学歴、時間、経済力等)を超えて、学びたいという主体的な意欲の、より強い人たちが、今回の京都大学に集まってきたのだということができるのである。「生きる元気をもらった」という言葉は、主催者側からすれば面映い言葉であるが、その言葉があながちオーバーなせりふに聞こえないほど、参加者は満足してくれたように思われる。

もうひとつは、この企画は、結果として京都大学に対するイメージの再確認にもなった、ということである。京都大学に対する大きな憧れがキャンパスライフへの強い動機となっていることは、応募者からも、実際の参加者からもよくうかがわれた。ディスカッションのなかからも出ている「他大学なら来なかった」「宝くじに当たったより嬉しい」「あの京大が……」ということばの端々に嬉しさが見て取ることができるのである。その気持ちは、参加者にとっては、キャンパス受講終了時においても変わらないどころか、総長をはじめとする講師やスタッフと近くで接触するなかで、より親近感を持つようになり、好感度もいっそう増したようである。

以上が全体としての講評であるが、残された課題も少なくない。参加者の中から自然発生的に出てきた「今後も継続してほしい」という声に京都大学がどのように応えるか、言い換えれば京都大学が今後貢献できることは何かをあらためて突きつけられた試みであったと言えよう。

## 2 「京都大学生涯教育学講座 シニアキャンパス」実施の概要

### (1) シニアキャンパスの趣旨と実施に至る経緯

#### 1) ジェイティービー受託研究について

2004年2月、京都大学は、株式会社 ジェイティービーより、以下のような研究を受託された。同研究は、大学院教育学研究科生涯教育学講座教授 前平泰志を研究担当とするものとされた。この受託研究の趣旨、費用、期間等は下記の通りである。

- ① 研究題目：高齢期の社会・文化活動に関する研究
- ② 研究目的及び内容：主として高齢期に着目し、日常そのものにある「学び」を、官と民、公と私、時間・空間を基軸に検討する。
- ③ 研究に要する経費 1,000,000円
- ④ 研究期間 2004年2月～3月末日

#### 2) シニアキャンパスの企画立案と記者会見・広報

上記の研究の趣旨を当該期間に達成するため、本講座の実践研究の一環として、具体的事業を行うことにした。「京都大学生涯教育学講座 シニアキャンパス」は、このような経緯を経て構想され、本講座スタッフの企画立案・運営によって実施されたものである。

2月に行われた記者会見の席では、出席した新聞記者からいくつか質問が出され、「シニア」が、50代以上を想定した用語であること、シニアキャンパスに関わる問い合わせは、生涯教育学講座が窓口になること、などが明らかにされた。この記者会見を受け、テレビ局を含む、関西圏を中心とするマスコミ各社によって、ジェイティービーの受託研究やシニアキャンパスの実施・募集に関する報道が行われた。本研究について取り上げたメディアと記事の掲載日・見出しは、講座で把握している範囲において、以下の通りである。

- ・2004年2月5日：読売新聞（夕刊）：（京大 共同研究 JTB 中高年の生涯学習 来月キャンパスツアー）
- ・2004年2月5日：日本経済新聞・大阪（夕刊）：シニア世代に学生生活体験 京大、JTB 委託で講座
- ・2004年2月6日：朝日新聞（朝刊）：京大と JTB が共同研究 シニア講座開講
- ・2004年2月6日：日刊工業新聞：生涯学習のあり方探る：京大 JTB と共同研究
- ・2004年2月6日：中国新聞（夕刊）：京大生の気分体験 中高年向け「学内ツアー」
- ・2004年2月6日：徳島新聞（夕刊）：中高年対象に学内体験ツアー京大が JTB と企画
- ・2004年2月6日：毎日新聞（朝刊）：京大 中高年の「学び」共同研究 JTB
- ・2004年2月6日：毎日放送：「ちちんぷいぷい」にて放映
- ・2004年2月10日：大阪日日新聞：“京大生”になりませんか？ 50歳以上を対象にツアー
- ・2004年3月27日：読売新聞（朝刊）：「シニアキャンパス」が京大でスタート
- ・2004年3月27日：京都新聞（朝刊）
- ・2004年3月27日：毎日放送：ニュース&天気：シニア世代 最高学府で学ぶ

・2004年4月10日：トラベルニュース

### 3) 資料請求、申し込みの状況

記者会見やメディアの報道による本研究への参加・協力者の募集に対して、当初の予測をはるかに上まわる数の資料請求や申し込みがあった。若いスタッフの多くは、シニア世代における大学での学びへの渴望とエネルギー、京大への熱い思いなどに圧倒されながら、対応に追われることとなった。

#### ① 電話による資料請求

電話による資料請求は、432件あった。そのうち女性245人、男性187人であった。この資料請求者に対しては、申し込み案内とともに「高齢者の社会文化活動」についてのアンケートを作成・同封し、協力依頼している。440部を送付し、378部の回答を得た（回収率は約85%）。この調査結果については2(3)を参照されたい。

#### ② 往復はがきによる申込み

シニアキャンパスの参加申し込みは、まず電話による資料請求を行い、その資料に掲載された必要事項を記入し、往復はがきで申し込むという形式で行われた。往復はがきでの応募者は、340人に上った。応募者の居住地は、関西圏（大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県など）に多く、それ以外の都県（新潟3名、宮崎、愛媛、岡山、徳島、東京都、群馬県から各1名）からも応募があった。応募者の属性などについては、2(2)を参照していただきたい。

### 4) シニアキャンパス参加者のプロフィール

往復はがきによる応募者340人の中から、厳正な抽選により35人の参加者を決定して本人に通知した。シニアキャンパス当日、仕事の都合及び体調不良による不参加の者が2名出たため、シニアキャンパス当日の受講者の平均年齢・居住地域は下記の通りになった。

① 参加人数 33人（うち、女性20人、男性13人）

② 平均年齢 約61歳

③ 居住地域 大阪20人、滋賀6人、兵庫3人、京都2人、和歌山1人、東京1人、群馬1人、宮崎1人

### (2) シニアキャンパスの日程およびプログラム

#### 1) 「京都大学生涯教育学講座 シニアキャンパス」全スケジュール

【第1日】 3月26日（金）主会場：京都大学百周年時計台記念館会議室Ⅲ

13：30 参加者集合・受付

14：15 開会挨拶

教育学研究科 研究科長

藤原 勝紀

## シニアキャンパス報告

- 教育学研究科生涯教育学講座 教授 前平 泰志  
JTB カルチャーサロン 取締役事業局長 小川 洋一
- 14:45 全体オリエンテーション  
教育学研究科生涯教育学講座 助手 林 美輝
- 15:45 休憩
- 16:00 講義 「江戸から見た京都大学」 辻本 雅史 教授  
(教育学研究科・教育史)
- 17:30 自由時間
- 18:30 夕食会(希望者のみ) 会場:カフェレストラン「カンフォーラ」
- 20:00 解散

### 【第2日】 3月27日(土) 主会場:京都大学百周年時計台記念館会議室Ⅲ

- 9:45 参加者集合
- 10:15 オリエンテーション
- 10:30 講義 「京都大学の隠れたカリキュラム」 竹内 洋 教授  
(教育学研究科・教育社会学)
- 12:00 学食体験 会場:西部生協会館「ルネ」
- 14:00 講義 「京都大学を語る」 尾池 和夫 総長
- 15:30 記念撮影(京都大学百周年時計台記念館前にて、参加者・総長・スタッフ)  
自由時間(ミニツアー:自由参加で、京都大学総合博物館などを見学)
- 18:00 懇親会(希望者のみ。) 会場:吉田食堂
- 20:00 解散

### 【第3日】 3月28日(日) 主会場:京都大学文学部新館第6講義室

- 9:45 参加者集合・受付
- 10:15 オリエンテーション
- 10:30 講義 「京都大学とカウンセラーの想い」 東山 紘久 副学長
- 12:00 昼食・休憩
- 14:00 インタビュー(グループ・ディスカッション、アンケート調査を含む。)
- 16:30 閉会挨拶・感謝状授与 教育学研究科生涯教育学講座 教授 前平泰志
- 17:00 解散

※所属・肩書き等は、実施当時のものである。

## 2) シニアキャンパス実施上の方針

3日間のスケジュールは主に、「京都大学」をテーマとする4つの講義とグループディスカッション、学食体験、懇親会などで構成された。

このような日程を充実かつ効果的なものにするために、事前に、参加者を属性が異なる5～6名のグループに分け、学習のための「ゆるやかなネットワーク」を設定した。各々、2人ずつのスタッフが関わり、参加者はこのグループのメンバーとともに、オリエンテーションやグループディスカッションを経験した。他の時間に参加者がグループに制約されることはなかったが、自由時間や移動時間を同じグループのメンバーと過ごす姿も多く見られた。短時間で参加者同士がうち解け合い、共通の話題を話し合えるアットホームな雰囲気が生まれたことは、その後の学習場面のスムーズな進行や、参加者同士のコミュニケーションや関係づくりにプラスに作用したと思われる。

スタッフの役割は、参加者に、個々のニーズや求めに応じた情報提供や各種のサポートを行う（特に1日目）と同時に、オリエンテーションやグループディスカッションの進行役として関わった。これらのスタッフ同士は、頻繁に情報交換し、またミーティングなどで、参加者全体の動向を把握するよう努めた。

### 3) プログラムと実施状況

#### 【3月26日（金）】

##### ① 開会式

13時30分より京都大学100周年時計台記念館3階の会議室Ⅲ前で受付を開始した。初日のみ、グループごとに着席するように設定したが、ほとんどの参加者は早めに来場して着席したため、開会式までの時間をもて余すほどであった。

開会式の挨拶では、藤原勝紀教育学研究科長、前平泰志教授、小川洋一 JTB カルチャーサロン取締役事務局長の3氏から、シニアキャンパスの意義が、それぞれの立場から語られた。参加者は緊張した面持ちで聞き入っていた。

##### ② オリエンテーション

前半は、林助手によるプログラムの概要の説明と諸注意であり、初めて大学での講義を体験する参加者への配慮をも含んだものであった。休憩後、後半はグループに分かれ、担当スタッフをまじえての自己紹介や質疑、話し合いなどを行った。そこでは各自がシニアキャンパスに応募した意気込みなどを語り合い、相互の交流を深めた。またスタッフも自らの立場や研究的関心を含めた自己紹介をするなど、なごやかな雰囲気が生まれた。

##### ③ 講義1 「江戸から見た京都大学」

辻本雅史教授（教育学研究科・教育史）は、専門である教育史学の視点から、京都大学に関する知見が展開された。京都大学が東京大学のライバルを関西に作ろうという意図から設けられたなどの成立の経緯や、江戸時代の教育の様式から見た京都大学における教育の様式などについて、述べられた。

最初の講義でもあり、参加者には緊張の色が見られたが、教授が用意されたレジュメにペンを走らせていた。教授の軽妙な語り方や切り口に熱心に聞き入り、引き込まれていった。なお、

本講義前に京都新聞の取材が行われ、教授が受講生を前に講義を行っている風景が、写真入りで翌日の朝刊に掲載された。

#### ④ 夕食会

京都大学正門横の「カフェレストラン カンフォーラ」は、昨年新たにオープンした京都大学生協が営業するレストランである。この夕食会は有料であり、希望者のみとされたが、参加者の半数の参加があった。辻本教授も参加してくださり、講義ではうかがえなかったお話をうかがえた。グループ以外の参加者同士やスタッフと接する機会として大いに盛り上がり、それぞれのテーブルで初日の感想などを語りあった。

### 【3月27日（土）】

#### ① 講義2 「京都大学の隠れたカリキュラム」

竹内洋教授（教育学研究科・教育社会学）は、辻本教授に引き続いて、歴史的な視点を多く取り入れた講義であった。東大のライバル校として設けられたことが、京都大学の学風に強い影響を与え、そのことが京都大学の学生、研究者にも影響を与えていることが明らかにされた。参加者からは、京都大学からは企業の社長などがそれほど生まれてこない背景などについての質問も出された。参加者は若干、講義に慣れてリラックスしてきたように見受けられた。

#### ② 学食体験

京都大学生がよく利用する、西部生協会館ルネにおいて昼食をとった。現在の大学生にとっては当たり前の利用風景であるが、参加者の中には、学食の利用方法などに戸惑う姿も見られた。実際の学生生活をもっとも肌で感じる事ができた時間ではなかったかと思われる。

#### ③ 講義3 「京都大学を語る」

尾池和夫総長の講義は、参加者の事前申し込みやアンケートなどにも期待の声が多かった。総長は、受験生などに京都大学を紹介するために用いる一連の資料、スライドを提示しながら、ご専門の地震などの話も交え、京都大学の現状や未来の展望について参加者に紹介された。法人化を受けての大学の指針や進行しつつある先進的な取り組みなどを紹介しながらのお話であり、京都大学の現在と未来の姿に思いを及ぼすことのできた講義だったとも言えよう。

参加者には、連日の講義でやや精神的・体力的な疲労が出てきたようにも見受けられたが、それにもまして積極的に講義を聴こうとの姿勢が印象的であった。なお、本講義中ではMBS（地元テレビ局毎日放送）による撮影が行われた。

#### ④ 写真撮影

尾池総長にも入っていただき、時計台を背景に、記念写真を撮影した。



⑤ 構内ミニツアー

自由参加のプログラムとして、京都大学総合博物館、中央図書館といった施設や京都大学本部構内における歴史的な建造物を巡るものであった。当初は、それほど多くの参加者を見込んでいなかったが、正規のスケジュールの中で、大学構内を自由に散策する時間が確保できなかったためか、多数の参加者を得ることとなった。参加者にとって、京都大学の歴史や雰囲気を感じるとともに、旅気分を感じられたひとときだったのではなかろうか。なお、このツアー中に、MBSによる参加者へのインタビューなども行われ、その様子は、総長の講義の様子とともに夕方のニュースとして流されることになった。

⑥ 懇親会

自由参加という形で、本大学の学生食堂の一つ「吉田食堂」において懇親会を行った。会場では、参加者全員にマイクがまわされ、個々の参加者から、個性や人生経験がうかがえる、熱のこもったショート・スピーチが披露された。各テーブルでは、参加者同士、参加者とスタッフがスピーチの感想を含め、シニアキャンパスでの経験や人生と学びなどについて自由に語り合い、親交を深めた。

【3月28日（日）】

① オリエンテーション

最終日は、場所を文学部新館第6講義室に移して行われた。時計台記念館の会議室が、会議用の特別な空間であったのに対し、最終日の会場は、実際に文学部の学生が講義を受ける場所であるため、参加者には好評であった。

② 講義4 「京都大学とカウンセラーの想い」

東山紘久副学長（教育学研究科・臨床心理学）は、臨床心理学とはどのような学問であるかという概説とともに「悩み」を深めることの意義などを京都大学の独立行政法人化の流れと合わせて語られた。

参加者は講師のユーモアたっぷりの名講義に、時折笑い声を挙げつつ、頷いていた。質問も活発に出され、臨床心理学に特別に興味をもつ参加者が、講師に向かって自分の考えの是非を問うた真摯な姿が印象に残った。

③ グループディスカッション

話し合いのテーマは、グループごとにある程度、事前に用意されていたが、当日は、それにとらわれないダイナミックな展開となった。こちらの意図をはるかに超えて、このディスカッションは、各々の参加者にとって、シニアキャンパスという学習経験の「まとめ」の場となったようである。話し合いの概要は、本稿3-(5)にまとめている。

全体としてみると、グループディスカッションにおいて参加者は、従来の学習経験と今回のシニアキャンパスを引き比べ、今後の京大や「次回」シニアキャンパスへの期待など、積極的

に意見を出し合っていた。どのグループも、用意した時間では足りないほど、白熱した話し合いが展開されていた。参加者の課題レポートなどからわかるように、このような比較的小規模な演習室において、テーマを決めて少人数で話し合う、というこの時間は、参加者にとって、「大学のゼミ」を体験したとの実感や満足度を得られる貴重な経験になったようである。

この時間は、当初、「グループインタビュー」として企画されたが、「聞き手」「話し手」と主客が分かれる一般的な「調査」のスタイルを用いるよりも、はるかに実りの多い研究的示唆が得ることができたと考えている。

#### ④ 閉会式

まず、前平教授がシニアキャンパス全般についての所感を述べた。参加者には「シニアキャンパスへの参加」という形での調査研究への協力に対して贈られることになった「感謝状」を、遠方からの参加者2名が代表して受け取った。

閉会式後も、参加者同士、参加者とグループ担当のスタッフが記念の写真撮影を行うなど、会場を去り難い雰囲気漂っていた。スタッフに挨拶して部屋を出る参加者の表情はどれも、さわやかな達成感の感じられるものであった。

### (3) 実施体制とスタッフ構成

シニアキャンパスの企画・運営には、京都大学大学院教育学研究科生涯教育学講座に所属する教員3人、大学院生8人の計11人に加え、学外のサポーター9人（本講座の在籍者ではないが、ゼミ活動や講演会など講座の研究活動と主な仕事分担に、参加・協力してきた現場の職員や他大学の学生など）の総勢20人である。以下にその一覧を挙げておく。

#### 教 員

前平 泰志教授

渡邊 洋子助教授（本原稿3(6)担当）

林 美輝助手（本原稿2担当）

#### 大学院生

倉知 典弘（本原稿2担当）

小林 伸行

猿山 隆子※

中尾 敦子※

生津 知子※（本原稿3(4)1）～4）担当）

宮崎 朗子※

安川由貴子※

渡辺 徹也※

#### サポーター

小川 崇※（本原稿3(3)7）担当）

小浦方洋子

小宅 理沙※（本原稿 3(3)1）～6）担当）

佐伯 彰彦

西村 淳暉※

野村 知二※（本原稿 3(3)7）、(4)2）、4）担当）

人見 麗子※

南澤由香里※（本原稿 3(2)担当）

矢野麻里美

（50音順。※はグループ担当者を表す。なお、本原稿 3(5)については、各グループの担当者が共同執筆した。）

### 3 シニアキャンパス参加者への調査結果の概要

#### (1) 調査の目的と方法

##### 1) 応募はがき回答項目及び応募者アンケート

調査目的：応募者のプロフィールの概要を集合的に把握する。

調査方法：平成16年2月6日のシニアキャンパス電話受付開始後に問い合わせをいただいた方に、案内リーフレットと応募者アンケートを送付し、申込の案内と応募者アンケートへの協力を依頼した。分析対象は、申込締め切り（3月5日）までに到着した応募はがきに記載された応募者の属性と、アンケート締切（3月10日）までに到着したアンケートである。

なお、応募者アンケートは無記名であり、応募はがきについては、その回答項目のうち、郵便番号と氏名は分析対象とせず、住所は都道府県のみデータとして取り扱った。

有効回答数：応募はがき；340、応募者アンケート；378

調査項目：〈応募はがき〉 ・性別 ・年齢 ・住所 ・受講希望動機  
〈応募者アンケート〉 ・事業の認知経路 ・参加動機  
・京都大学のイメージ ・案内に対する感想  
・事業に対する要望 ・社会活動参加状況  
・性別 ・居住地（市町村区まで） ・年齢  
・最終学歴 ・現在及び以前の職業 ・家族構成  
・日常生活費の原資 ・世帯収入

備考：応募はがき回答数と応募者アンケート回収数に38件の差があった。これは、参加応募には至らなかったもののアンケートには協力いただいた回答者があったためであるが、締め切りが異なっていたことも影響していると考えられる。

##### 2) 参加者アンケート

調査目的：シニアキャンパス参加者による事業の評価及び今後の希望を把握する。

調査方法：シニアキャンパス最終日の講義終了後に実施（回答方法を説明した後、集合調

## シニアキャンパス報告

査、自記入式、無記名)。

実施期間：平成16年3月28日

有効回答数：33

回収率：100.0%

調査項目：・事業への満足／不満足  
・今後の事業に対する期待  
・経験した生涯学習活動  
・年齢層  
・3日間の充実度  
・京都大学のイメージ  
・性別

### (2) 応募はがきに見る応募者のプロフィール

#### 1 回答者（応募者）のプロフィール

a 性別 回答者（N=340）の性別内訳は、女性57.35%、男性42.65%となり、女性が男性を約15%上回る。

表1 性別分布

	度数	パーセント
女	195	57.35
男	145	42.65
合計	340	100.00

b 年齢 年齢構成は、平均で61.73歳となるが、グラフに明らかなように、ピークが分かれる双峰分布となっており、これは女性の年齢分布（平均59.42歳、中央値57歳、最頻値55歳）と男性の年齢分布（平均64.82歳、中央値65歳、最頻値は66歳と67歳）のずれに対応している。おおむね、女性は若年齢に分布し、男性は高年齢に分布の重心がある。なお、年齢分布の広がりには女性においてわずかに広がる。

表2 年齢分布

	年令, 合計	年令, 女	年令, 男
平均	61.727	59.420	64.819
標準偏差	7.473	7.093	6.845
例数	337	193	144
最小値	49.000	49.000	50.000
最大値	86.000	86.000	84.000
変動係数	.121	.119	.106
範囲	37.000	37.000	34.000
中央値	62.000	57.000	65.000
最頻値	63.000	55.000	・
10% 調整平均	61.303	58.684	64.879

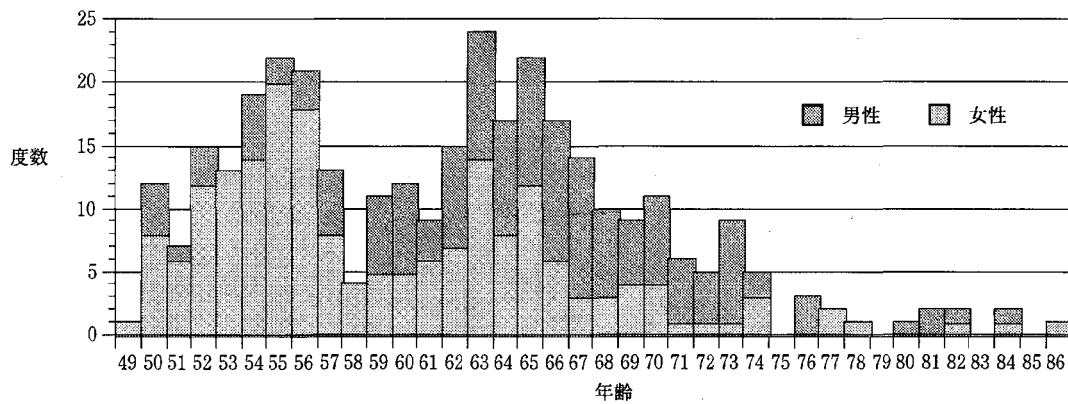


図1 性別年齢分布

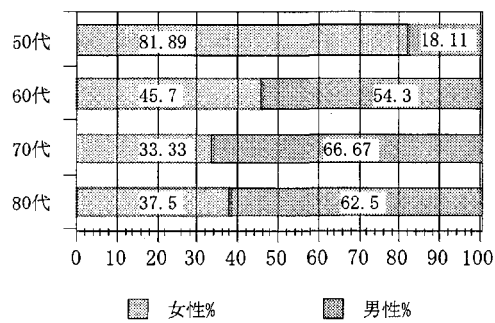


図2 年代別性別比率

c 居住地 回答者の居住地は、大阪府が最多（129人、38.2%）となり、京都府、兵庫県（いずれも73人、6.2%）、滋賀県（21人、6.2%）、奈良県（19人、5.6%）、和歌山県（9人、2.7%）と続く。

表3 居住都道府県分布

	度数	パーセント
群馬県	1	.30
東京都	3	.89
新潟県	3	.89
滋賀県	21	6.23
京都府	73	21.66
大阪府	129	38.28
兵庫県	73	21.66
奈良県	19	5.64
和歌山県	9	2.67
岡山県	2	.59
広島県	1	.30
徳島県	1	.30
愛媛県	1	.30
宮崎県	1	.30
合計	337	100.00

# シニアキャンパス報告

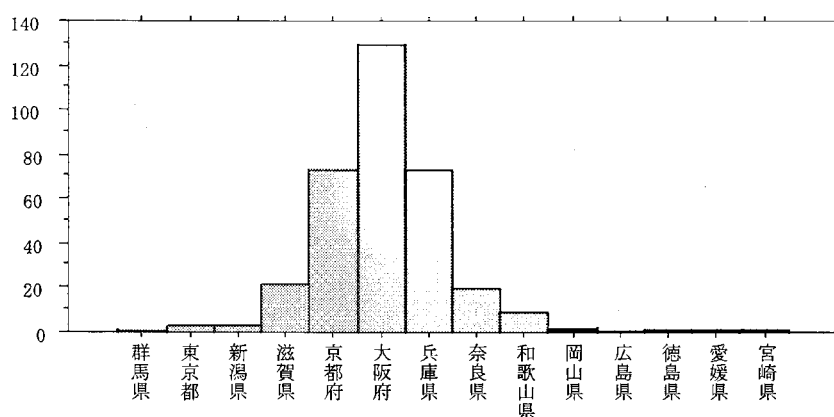


図3 居住都道府県分布

## 2 受講希望動機

表4 回答中に含まれる主なキーワード統計

(単位；出現回数)

・「京都大学」、「京大」	139	・「青春」	10
・「学び」、「まなび」	51	・「ボランティア」	10
・「あこがれ」、「憧れ」	41	・「模索」	8
・「退職」、「定年」、「リタイヤ」	38	・「子育て」、「子そだて」	8
・「人生」	35	・「刺激」	7
・「生涯学習」、「生涯教育」	33	・「公開講座」	6
・「経験」、「体験」	31	・「向学心」	6
・「勉強したい」、「学びたい」	28	・「自由な」(校風)	6
・「知識」、「教養」、「見聞」	22	・「生き甲斐」、「生きがい」	5
・「京都(「京都大学」除く)」	20	・「カルチャーセンター」	5
・「高齢」、「高齢者」	15	・「ゆとり」、「自由時間」	5
・「大学生活」	13	・「旅行」、「JTB」	5
・「息子」、「娘」	12	・「総長」	4
・「有意義」	11	・「ノーベル賞」	4
・「充実」	11		

〈回答の傾向と主な回答例(抜粋)〉

○京都大学へのあこがれ、興味 (157)

「学生時代から憧れていた京都大学で最高水準の学問に触れられる機会なので」 (107)

「夫が卒業し、今は娘が通う京都大学について深く知りたい」 (50)

○まなびへの意欲、新しい学びへの期待 (127)

「生涯学習をしたい」「今までと違った分野を学びたい」 (93)

「今までいろいろなカルチャーセンターを受講し、少し物足りなさを感じ始めたときに新聞を目にして、もう少し納得したものを得ることができないか」 (23)

「生涯教育に関心があり、専門の先生方の講演をお聞きしたいと思った。」 (11)

○セカンドステージのきっかけ (111)

「定年退職を機に第2の人生を有意義に暮らすための指針を決めるきっかけとして」

「子育て後、主婦である私も大学で勉強したいと思った」

「学ぶきっかけを体験し今後の方向を見つけたい」

「残りの人生を有意義に過ごすためのヒントを得たい」

○事業内容への興味・関心 (52)

「大学生活の経験がないため、体験し雰囲気を感じたい」 (42)

「“シニア対象”講座という記事に胸躍る」 (10)

○社会活動への弾み (17)

「今までの技術中心の「知」からその他の「知」に向けて視野を拡大することで、いっそう社会に貢献できないかを探るため」 (14)

「現在関わっているボランティア活動に役立てたい」 (3)

○ふれあい、仲間作り、交流 (13)

「今までに関わりのないジャンルの人との交流ができればと思う」

「人と人との交流を広げ、深めながら、社会参加の輪を広げたいと思い、参加を希望しました」

○「産学連携」への興味・関心 (28)

「大学法人化を前にして産学連携に興味があるので」

「意外性と当然性を混ぜにした産学連携講座に新鮮な展開を予感した」

○（その他）旅が好き、JTB 関連

「よくある大学講座と違って JTB との連携の下に催されるということで遊び心をくすぐられるものを感じた」

(3) 応募者アンケート結果の概要

1) 回答者のプロフィール

a 性別 回答者 (N=378) の性別内訳は、女性52.91%、男性40.48%となり、女性

が男性を約12.5%上回る。

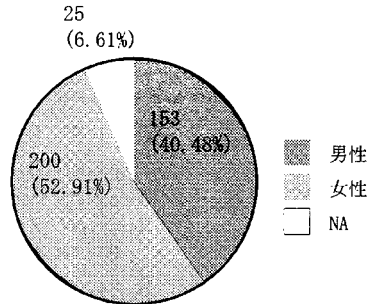


図4 性別比率

- b 年 齢 応募はがきと同様に、性別分布は双峰分布となっており、これは女性の年齢分布と男性の年齢分布のずれに対応している。女性は若年齢に分布し、男性は高年齢に分布の重心がある。性別の年齢分布を、応募はがきの回答項目と比較すると、記述統計の各値はほぼ完全に一致する（表5）。このことから、応募はがきによる回答者と、応募者アンケートの回答者は、ほぼ同一であるとみなすことができる。

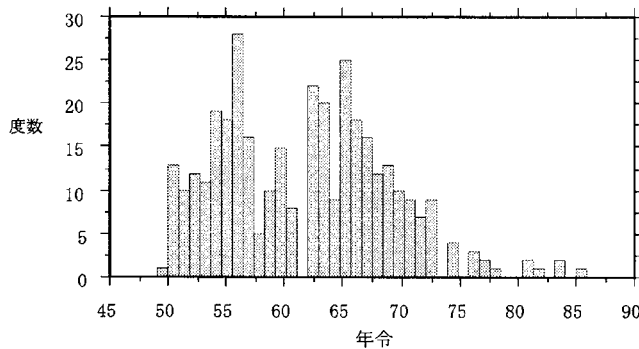


図5 年齢分布

表5 性別年齢分布

	年齢, 合計	年齢, 男性	年齢, 女性
平均	61.739	64.627	59.518
標準偏差	7.317	6.777	6.946
例数	352	153	199
最小値	49.000	50.000	49.000
最大値	86.000	84.000	86.000
変動係数	.119	.105	.117
範囲	37.000	34.000	37.000
中央値	62.000	65.000	58.000
最頻値	56.000	65.000	56.000
10% 調整平均	61.429	64.829	58.863

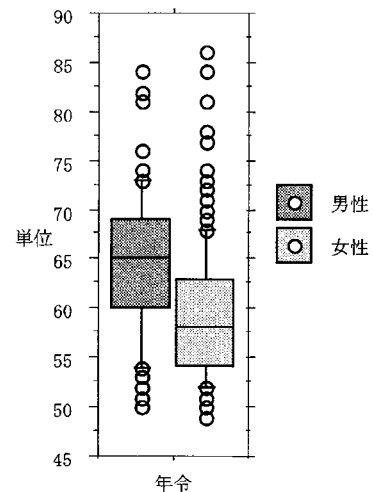


図6 ボックスプロット  
(年齢×性別)



- c 居住地 居住地に関する分布も、応募はがき回答項目とほぼ同一のものである。大阪府が飛び抜けて多く（145人、38.36%）、京都府（75人、19.84%）、兵庫県（73人、19.31%）がそれに続く。

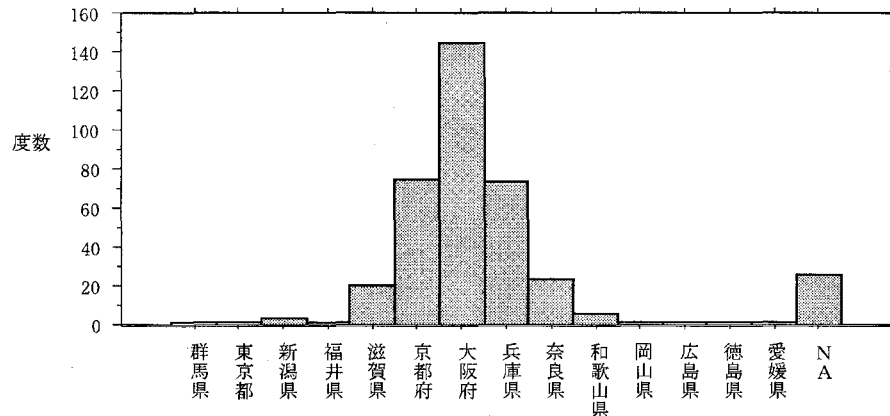


図7 居住地分布

- d 職種 職業（職種）については、「現在の仕事」と「退職以前の仕事」に分けてたずねている。まず、現在の仕事については、「無職」が最大となり、「家事専業」が続く。他は「その他」が第3位となることから、この2つ職種が本アンケート回答者の大勢と見てよい。これを性別で区分すると、男性においては「無職」が多く、女性においては「家事専業」が飛び抜けて多くなる。

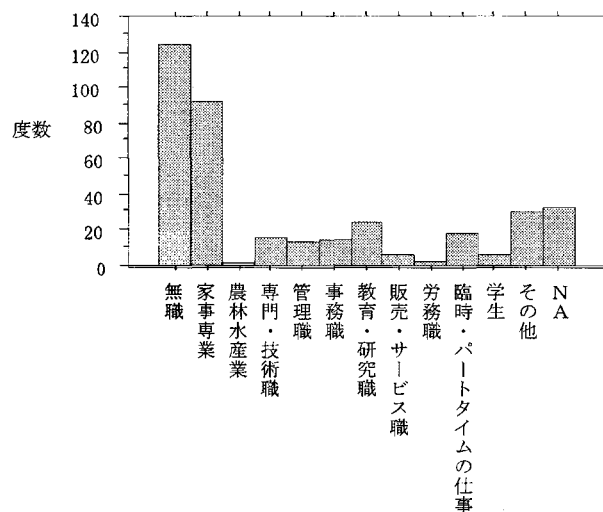


図8 職業分布（現在の職業）

表6 性別職業分布（無職、家事専業）

	合計 度数	合計 パーセント	男性 度数	男性 パーセント	女性 度数	女性 パーセント
無職	124	32.80	92	60.13	32	16.00
家事専業	92	24.34	0	0.00	92	46.00

男性で「家事専業」と回答した者はいない

「以前の仕事」については、NA（無回答）が非常に大きくなる。これを性別で区分すると、NAと答えた者のほとんどが女性であり、これは、「家事専業」が選択肢に示されなかったためと考えられる。

男性の「退職以前の仕事」については、「管理職」の多さ（約40%）が特徴的である。また、「専門・技術職」、「教育・研究職」を合計すると、約20%が、いわゆる「専門職」となる一方で「事務職」、「販売・サービス職」の少なさが目立つ。

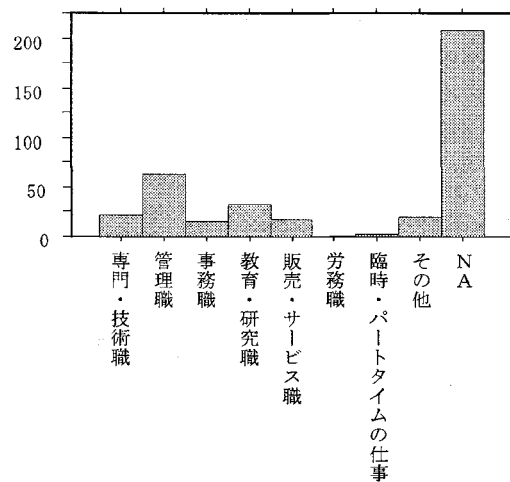


図9 職業分布（以前の職業）

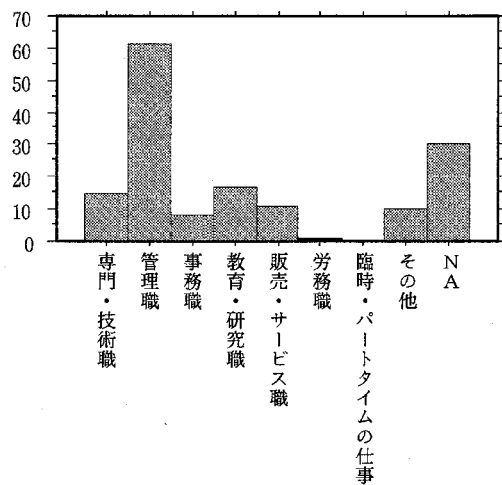


図10 性別職業分布（以前の職業）；男性

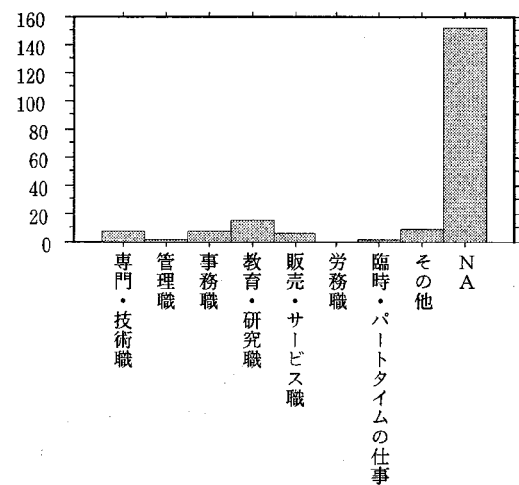


図11 性別職業分布（以前の職業）；女性

表7 現在の仕事（その他）

(9人)	講師、顧問、インストラクター
(各2人)	ヘルパー、NPO職員、アドバイザー、嘱託公務員
(各1人)	不動産賃貸、調理師、作詞・作曲、スポーツコーチ、薬剤師、代議士 フリー企画業、執筆業

表8 退職以前の仕事（その他）

(4人)	会社経営、会社顧問、会社役員
(各1人)	放送、新聞記者、広告代理業、私塾、整理回収機構、料理講師、企業の編 み物教師、給食調理員、学校職員、地方議員

- e 最終学歴 「最後に出られた学校」として最終学歴をたずねたところ、「未就学」との回答はなく、大学（旧制高等学校・新制大学院を含む）が最大となった。ただし、これには性差が見られ、男性では大学が約74%と最頻となるが、女性では「大学」と「高等学校（旧制中学校含む）」が約40%で拮抗する。なお、世代による目立った差はみられない。

# シニアキャンパス報告

表 9 最終学歴

	度数	パーセント
中学校（含旧制尋常小学校）	3	.79
高等学校（含旧制中学校）	115	30.42
短期大学（含高等専門学校）	40	10.58
大学（含旧制高校・新制大学院）	192	50.79
NA	28	7.41
合計	378	100.00

表10 性別最終学歴

	合計 度数	合計 パーセント	男性 度数	男性 パーセント	女性 度数	女性 パーセント
中学校（含旧制尋常小学校）	3	.79	2	1.31	1	.50
高等学校（含旧制中学校）	115	30.42	33	21.57	82	41.00
短期大学（含高等専門学校）	40	10.58	5	3.27	35	17.50
大学（含旧制高校・新制大学院）	192	50.79	113	73.86	79	39.50
NA	28	7.41	0	0.00	3	1.50
合計	378	100.00	153	100.00	200	100.00

f 家族構成 回答者の世帯構成は、配偶者とのみ同居している回答者が144人（38.1%）と、もっとも多くなる。続いて配偶者とのみ同居している回答者が約3割、独居である「一人暮らし」が約1割（42人）となる。他の組み合わせは度数が少なく、ほとんど無視できる。

これを性によって分割すると、「一人暮らし」のカテゴリーにおいて差が生じる。女性には、年齢が高くなるほど「配偶者・子」の回答が減り、「一人暮らし」の回答が増える傾向を見ることができるが、男性には年齢分布から明瞭なトレンドを読むことはできない。男性はどの年齢層においても「一人暮らし」の回答は少ない。

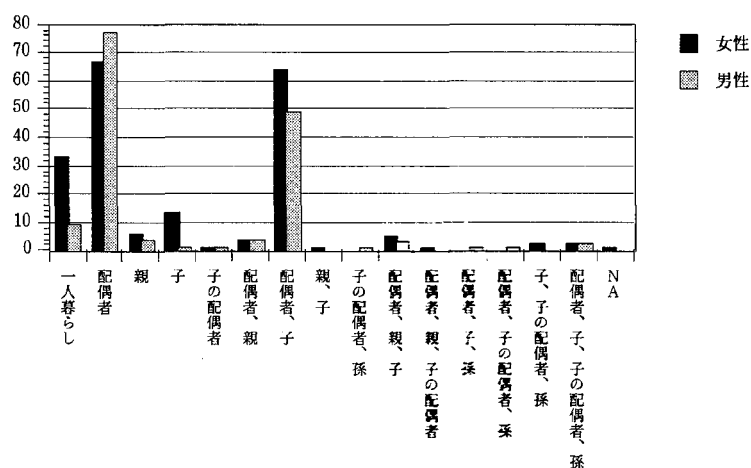


図12 性別家族構成分布

- g 日常生活費 日常生活費の原資を、主なもの一つに限ってたずねている。全体としては「自分の年金」(32.3%)、配偶者の仕事による収入(21.4%)、自分の仕事による収入(14.3%)となるが、女性は「配偶者の仕事による収入」が40%と最大で、男性は「自分の年金による収入」(64.7%)となる。女性も男性も、「自分の仕事による収入」は2割に満たない。

表11 主な生計の原資

	度数	パーセント
自分の年金	122	32.28
配偶者の年金	35	9.26
自分の仕事による収入	54	14.29
配偶者の仕事による収入	81	21.43
貯金の取り崩し	13	3.44
地代・家賃・利子等	5	1.32
その他	5	1.32
NA	63	16.67
合計	378	100.00

- h 所得 所得については、「300-500万円」のカテゴリーをピークとして、所得の高いカテゴリーに向かって裾を引く分布となっている。性別に見ると、女性については、「300-500万円」のカテゴリーが最大となることは全体傾向と変わらないが、上位の所得カテゴリーにも同程度分布しており、「1000万円以上」と答える回答者も約2割にのぼる。一方男性は、「300-500万円」のカテゴリーをピークとしながら、それより上位の所得カテゴリーの回答者はずっと少なくなっている。ただしこれらの傾向は、参加者の年齢分布の差によるものであり、年齢層が高くなるほど所得カテゴリーがより低くなることは共通している。

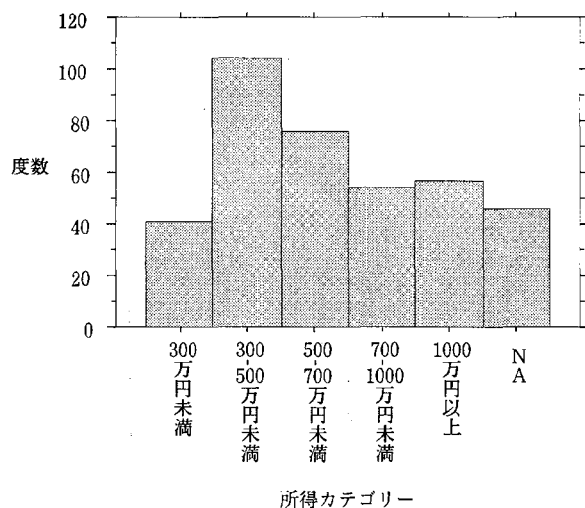


図13 所得分布

## 2 社会活動への参加状況

### a 社会活動の参加経験

社会活動への参加状況をたずねたところ、回答者の実に88.6%が「参加したことがある」と答える。経験が本質的に累積としての性格をもつために、この回答が「今現在」の活動を表しているとは限らないが、後に見る年齢層と参加状況、年齢と活動日数などの結果から推察すると、経験の累積による見かけ上の参加率の高さであるとは言いにくい。この参加率の高さは、性別、年齢層別、所得カテゴリー別に群を分割しても維持され、本調査の回答者の共通した特徴であると見ることができる。

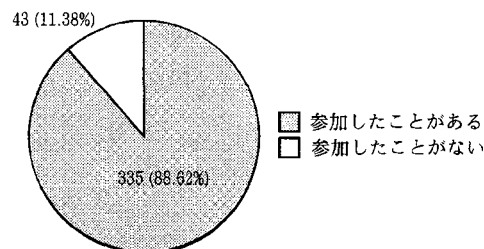


図14 社会活動の参加状況

なお、「参加したことがない」と答えた43人中、無回答を除く39人が選んだ不参加の理由は、26人が「時間的余裕がない」とし、6人が「参加したい活動がない」と答えている。

### b 活動内容

参加したことのある社会活動の内容を、頻度の高い順に選択肢から3つ選んでもらう形でたずねた。選択肢は、「大学の公開講座」「老人大学」「カルチャーセンター」「老人クラブ」「町内会・自治会等」「趣味のサークル」「ボランティア活動（NPOを含む）」「通信教育」「その他」の9つである。

参加頻度の第1位において選ばれることが多いのは、「趣味のサークル」(19.95%)、「ボランティア活動」(15.16%)、「カルチャーセンター」(14.89%)であり、「その他」(13.56%)、「大学の公開講座」(11.97%)がそれに続く。

参加頻度第2位も第1位と似た傾向であるが、参加頻度第3位において「町内会・自治会等」(15.49%)が2位にランクインする。「老人大学」、「老人クラブ」といった、明らかに高齢者(のみ)を対象とした活動はどの参加頻度においても少なく、「通信教育」も低率である。

なお、性別に活動内容を見ると、男性は〈1位〉「大学の公開講座」、〈2位〉「ボランティア活動（NPO含む）」、〈3位〉「その他」の順となる。一方女性では〈1位〉「趣味のサークル」、〈2位〉「ボランティア活動（NPO含む）」、〈3位〉「カルチャーセンター」となり、性別による活動内容の違いが見られる。

表12 参加活動の1位として選ばれる項目

	度数	パーセント
大学の公開講座	45	11.97
老人大学	13	3.46
カルチャーセンター	56	14.89
老人クラブ	1	.27
町内会・自治会等	24	6.38
趣味のサークル	75	19.95
ボランティア活動（含NPO）	57	15.16
通信教育	11	2.93
その他	51	13.56
NA	43	11.44
合計	376	100.00

表13 性別社会活動の内容（上位4位まで）

	男性	女性
1位	大学の公開講座 (15.69)	趣味のサークル (25.76)
2位	ボランティア活動 (14.38)	ボランティア活動 (17.17)
3位	その他 (13.07)	カルチャーセンター(16.67)
4位	趣味のサークル (12.42) カルチャーセンター	その他 (13.64)

参加頻度第1位から。NA（無回答）除く。

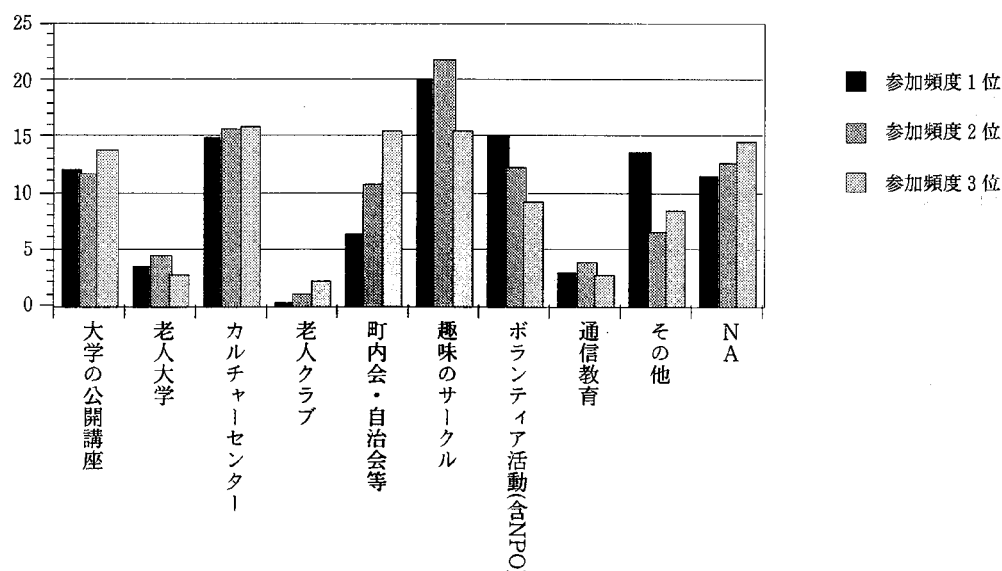


図15 活動内容別参加頻度

### c 活動日数

社会活動の1ヶ月の活動日数は、平均6.22日、最頻値は4日になる。これを性別に見ると、

最頻値である4日は同じであるが、平均日数と中央値において男性の方が1日多くなる。ただしこれは、男性において「20日」「30日」という回答が女性より多くあったことから、重心が高い方にずれたためであり、調整平均からも男女で活動日数に違いがあるというほどではない。なお、平均差の検定においても、 $t=1.35$ 、 $p=0.1785$ となり、差があるとまでは言えない。

表14 性別社会活動の活動日数

	活動日数, 合計	活動日数, 男性	活動日数, 女性
平均	6.22	6.51	5.77
標準偏差	4.81	5.49	4.01
最小値	1.00	1.00	1.00
最大値	30.00	30.00	20.00
変動係数	.77	.84	.70
中央値	5.00	5.00	4.00
10% 調整平均	5.43	5.57	5.18

また、社会活動の日数は年齢や所得との関連も弱い。年齢との相関はほぼゼロ ( $R=0.003$ ) であり、所得カテゴリーによる分散分析においても、ほとんど関連は見られなかった。一方、最終学歴との分割表分析では、最終学歴が中学校（旧制尋常小学校含む）の回答者において、活動日数の平均値が跳ね上がる（12.33日）が、度数はわずか3にすぎない。

#### d 社会活動の費用

1ヶ月の活動費用については、平均6,763円、調整平均で5,683円となる。性別で見た調整平均では、男性が5,810円、女性が5,684円で、わずかに男性の方が費用が高くなるが、性差があるというほどではない ( $t=0.059$ 、 $p=0.5575$ )。

この活動費用は、年齢、職種（現在／退職前）、学歴、所得といった、回答者の属性との関係をもたず、費用の多少を説明するのは、活動日数 ( $R=0.47$ ) と活動の拠点までの距離 ( $R=$

図16 回帰グラフ（費用×活動日数）

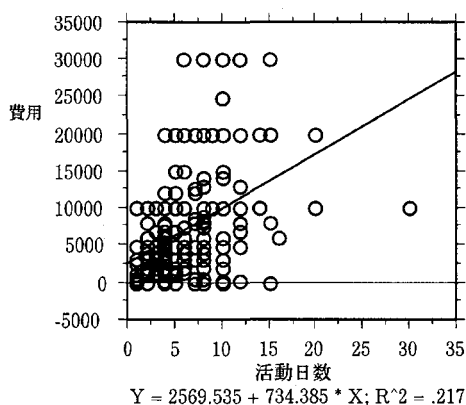
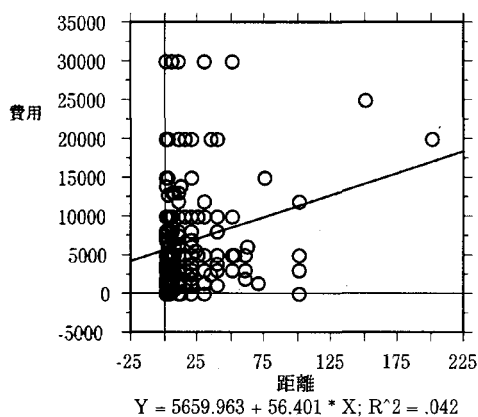


図17 回帰グラフ（費用×活動の拠点までの距離）





0.20) のみである。ただし、距離と費用の関係は、決定係数  $R^2=0.042$  であることから、明瞭なものではない。

#### e 活動の拠点までの距離

活動の拠点までの距離については、直接に数字（キロメートル）を記入していただく回答を得たが、最小値0キロメートル～最大値2000キロメートルまでにレンジが広がり、解析になじまないため、名義変数化の調整を行った。なお、調整前の調整平均は10.68キロメートルであり、男性13.68キロメートル、女性8.26キロメートルとなっている。

この性別による差を名義変数を用いたヒストグラムで見ると、男性にあっては「0-1Km」から「51km 以上」まで度数が散らばっており、一方女性の方は、距離が遠くなるほど度数が減少する傾向を読むことができる。

表15 性別活動の拠点までの距離

	距離, 合計	距離, 男性	距離, 女性	距離, NA
平均	24.23	17.90	25.87	50.33
標準偏差	125.59	22.81	164.30	139.41
最小値	0.00	0.00	0.00	0.00
最大値	2000.00	150.00	2000.00	600.00
変動係数	5.18	1.27	6.35	2.77
範囲	2000.00	150.00	2000.00	600.00
10% 調整平均	10.68	13.65	8.26	19.12

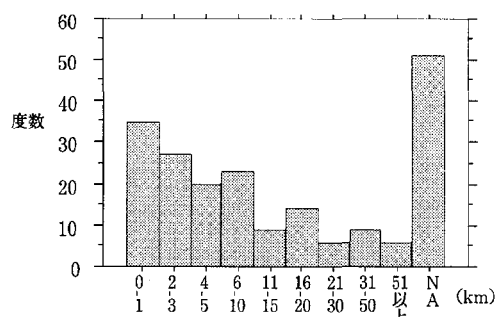
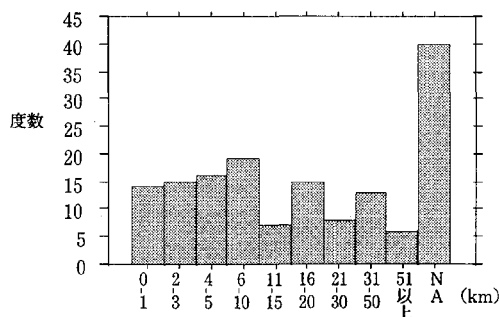


図18 活動の拠点までの距離の分布（男性）

図19 活動の拠点までの距離の分布（女性）

また、活動の拠点までの距離と年齢との間には、予測に反してほとんど関連がない。年齢を独立変数に、距離を従属変数にとった回帰分析上、年齢の上昇（下降）が距離の分散を説明する程度は、わずかに1.3%に過ぎなかった（ $R^2=0.013$ ）。同様に、他の属性変数（学歴、現在の職業、退職前の職業）との間にもほぼまったく関係らしきものはみられなかった。

これらの社会活動に関連する解析からは、本調査の参加者にとっては、社会活動に参加して

## シニアキャンパス報告

いるか否か、費用が多いか少ないか、活動の拠点までの距離がどれくらいかということは、性別以外の属性要因では説明することができず、回答者の社会活動のリアリティに迫るためには、より質的に踏み込んだ調査が必要と考えられる。

### 3 シニアキャンパスの認知経路

調査票の冒頭においてたずねた、「シニアキャンパスをどのようにしてお知りになりましたか」という質問に対しては、「新聞を見て」という回答が圧倒的多数を占めた。他の選択肢であるテレビやラジオ\*などの電波系メディア、知人や家族\*を通じての口コミ、JTBサロンを通じての回答はわずかである。この傾向には、性別、年齢層、職種（現在、退職以前）、最終学歴、家族構成、社会活動の有無など、他の属性的項目との関連が見られないことから、今回の事業の周知においては、新聞が決定的な役割を果たしたことが理解される。

\*「その他」に区分した

表16 シニアキャンパスの認知経路

	度数	パーセント
JTB サロン	4	1.06
知人を通じて	11	2.91
新聞を見て	321	84.92
テレビを見て	36	9.52
その他	5	1.32
NA	1	.26
合計	378	100.00

### 4 参加理由

シニアキャンパスの参加（応募）理由について、「とても当てはまる」から「まったく当てはまらない」まで、程度（4 択）を含めてたずねた結果が下の図である。

確認しておくべきことは、本質問の結果は、性別、年齢層、職業（現在、退職前）、学歴、社会活動の有無といった、属性的項目にほぼ影響を受けないことである。それら項目との分割表分析上、分布の差は小さく、ゆえに単純集

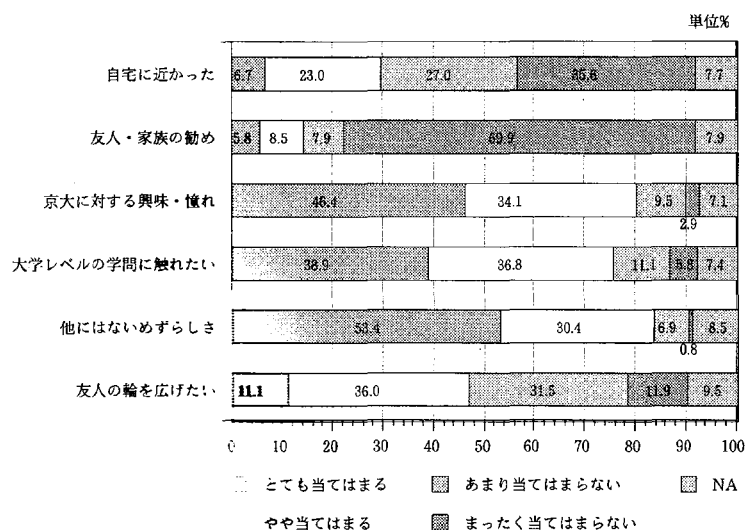


図20 シニアキャンパス応募理由

計の結果はかなり頑健な（回答者の多くに共通した）ものである。

結果を順に見ると、まず、「自宅に近いかどうか」は、応募者にとってあまり問題にならないようである。そして前質問（認知経路としての口コミの少なさ）にもあったように、事業の参加理由として、他者からの勧めはあまりきっかけになっていないことから、応募は、自らが情報に触れ、自ら選択した行動と解釈できる。応募の動機として強く肯定されるのは「京大」に対する興味ないし憧れと大学の学問に触れたいという希望であり、これは応募はがきの自由回答結果とも傾向が一致する。選択肢の中で、もっとも肯定する割合が高かったのは「他にはないめずらしさ」である。解釈はさまざまに可能であるが、京都大学に対する普段からの印象、さらに JTB とのコラボレーションであること、「シニア」に的を絞った事業であることなどが結果に関係したものではないだろうか。なお、「友人の輪を広げたい」という参加理由は、肯定する回答者が約半数ではあるものの、強い肯定（とても当てはまる）が少ないことから、さして重視される理由ではない（また積極的に否定するものでもない）ことがうかがえる。

なお、「その他」として自由回答にあった応募理由は以下のとおりである。

表17 シニアキャンパスに参加しようと思った理由（その他）

- ・京大の施設、建物、伝える知に興味／好奇心 10  
「歴史ある建物やキャンパスの雰囲気に触れてみたい」、「外から眺めていた京大の中に入りたい」など
- ・自分の知識を広げたい 9  
「技術系なので、他分野の知識を得たかった」、「知的刺激を取り入れていきたい」など
- ・家族が出身（在学）。→ 一度見てみたい 8  
「父の出身校で親しみを感じていたから」、「息子が学部、院でお世話になり（略）その校風、中身を少しでも知りたかったから」など
- ・研究そのもの（シニアの生涯学習）に関心 8  
「大学の社会人教育への意識を知りたかった」、「シニアの生涯教育のあり方研究に興味がある」など。
- ・生き甲斐を見つけたい 6  
「学ぶことについて青春をとりもどしたかった」、「第二の人生について何か生き甲斐を探しています」など
- ・これまで学べなかった。学びたい 3  
「せっかくの学生時代は学ぶことが嫌いで……それが人生の汚点のような（トラウマ）になっているから」など
- ・（〇〇先生の）講義を聴きたい 4  
「学長のお話を聞きたい」、「竹内洋教授の講演を聴きたかったから」など
- ・JTB との共同企画に関心／疑問 1  
「JTB との共同企画という点・試みへの興味」
- ・地元であり、懐かしい 1  
「結婚するまで（略）京大を自分の家のように行動していて懐かしかった」

## 5 学びの場としての京都大学のイメージ

前質問で、応募理由としての「京都大学に対する興味・憧れ」の大きさが示されたが、それでは応募者が感じている京都大学のイメージはどのようなものなのだろうか。京都大学の学びの場としての4つの機能イメージを示し、「とても当てはまる」から「まったく当てはまらない」までの4択でたずねた。

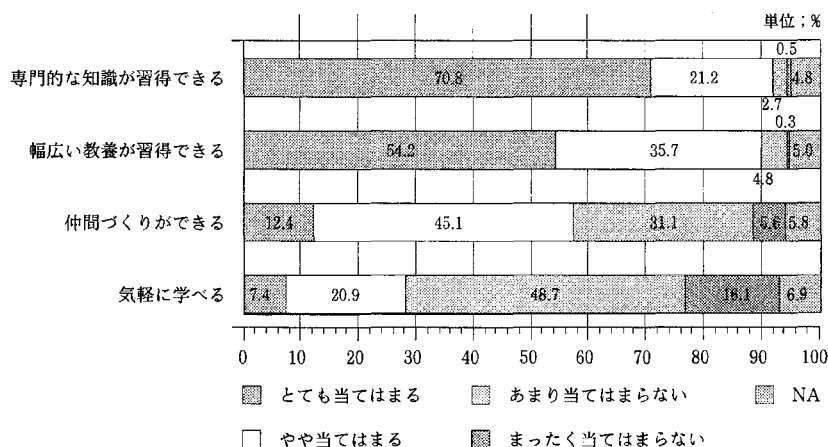


図21 学びの場としての京都大学のイメージ

まず、9割の回答者が肯定するのが、「専門的な知識が習得できる」である。ただし、この結果を詳細に見ると、年齢層により分布の差が生じる。年齢層とのクロスを行ったところ、全体としての「専門知識の習得」に対する肯定は一貫しているが、年齢層が上がるにつれ「とても当てはまる」が逡減し、その逆に「やや当てはまる」が上昇する傾向が見て取れる。

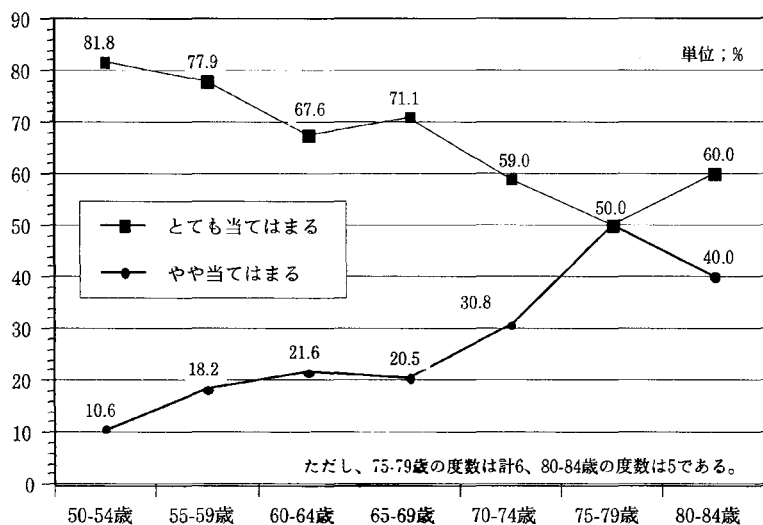


図22 年齢層別に見た「専門的な知識が習得できる」に対する肯定的回答の比率

また、「専門的な知識が習得できる」についての反応の分布は、最終学歴によっても差が観察される。最終学歴が「中学校（旧制尋常小学校含む）」、「高等学校（旧制中学校含む）」と、短期大学（高等専門学校含む）、「大学」旧制高校・新制大学院含むの2カテゴリーで比較すると、後者の方が「とても当てはまる」と回答する割合が大きくなる（ただし、「中学校」の全体度数は3）。この傾向が年齢の効果に影響されたものなのか、それとも学歴による純粋な効果なのかは、観測度数が少なく、分割表上のセル値が足りないため、今回の調査では明らかにされない。

表18 クロス表（専門的な知識が習得できる×最終学歴）

	とても当てはまる	やや当てはまる
中学校（含旧制尋常小学校）	66.67	0.00
高等学校（含旧制中学校）	66.09	24.35
短期大学（含高等専門学校）	76.92	17.95
大学（含旧制高校・新制大学院）	74.48	18.75
NA	57.14	32.14

表は一部省略している

一方、「幅広い教養が習得できる」についても、やはり回答者の9割が肯定の回答を行う。ある意味で「専門的な知識」とは対となる、「幅広い教養」ではあるが、対立する概念として受け取られることなく、いわば京都大学は「専門知識」も「教養」も学べるところとイメージされているようである。ただし、「幅広い教養が習得できる」の回答については、「専門的な知識が習得できる」の回答に比べて、強い肯定の回答（とても当てはまる）の割合が下がる。わずかな傾向ではあろうが、回答者にとっての京都大学に対するイメージは、どちらかといえば「専門的な知識が習得できる」の方が強いようである。

「仲間作りができる」という質問についても、回答者の約半数が肯定するが、前述の知識や

表19 「学びの場」としての京都大学のイメージ（その他）

〈ポジティブ〉	〈ネガティブ〉
・おおらかな学風／開放的 6	・近寄りやすい／権威主義 2
・アカデミック／ノーベル賞 5	・（学ぶのに際して）緊張感がある 1
・自由な発想 4	・時代遅れ 1
・反骨精神 4	
・歴史と伝統（がある） 2	〈ニュートラル〉
・個性的 2	・日本文化の縮図 1
・関西の雄 1	・ギャングスターズ 1
・親しみがもてる 1	

## シニアキャンパス報告

教養に関する質問に比して、肯定する割合がずっと下がり、その程度も「やや当てはまる」が多くなる。ついで「気軽に学べる」の質問となれば、肯定する割合自体が大きく下がり、「とても当てはまる」は7.4%に過ぎなくなる。

上記これらのことから、学びの場としての京都大学とは、まずもって知識や教養が、とりわけ専門的な知識が習得できる場所であるが、かならずしも気軽に学べる場所ではなく、また、仲間作りもできなくはない程度である、とイメージされていると解釈することができる。

### 6) 事業案内の印象

電話等で問い合わせのあった人に送付した案内リーフレットに対する感想を、資料に要する費用、講演回数、講演テーマ、受講定員、自由時間、その他に関し、それぞれ3段階のスケールでたずねた。

#### a 資料に要する費用

まず資料に要する費用であるが、今回のシニアキャンパスでは受講料が無料とされ、その旨がリーフレットに記載されており、その上で設定された2,000円の資料代に対する感想である。結果はグラフのとおりであり、「高い」と答えた回答者はごく少ない（9名）。属性項目での分割表でも分布の差が見られず、結果は応募者にほぼ共通した感想である。

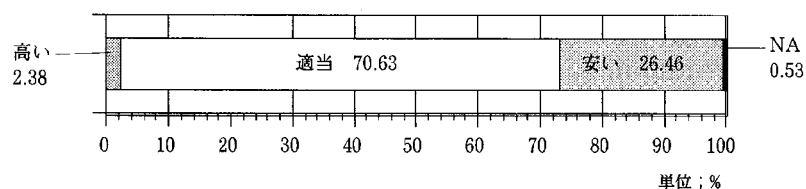


図23 事業案内の印象（資料に要する費用）

#### b 講演回数

3日間にわたり4回行われるものとされた講演（講義）の、回数の多少に対する感想は、約7割の回答者が「適当」とするが、「少ない」とする回答者も3割弱にのぼる。分割表で確認すると、この感想は年齢層で60歳から64歳の回答者に多くなる。なお、性別による回答の分布の差は見られない。

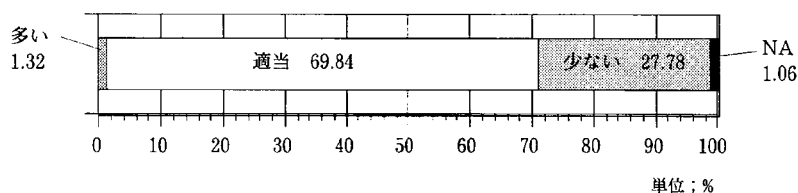


図24 事業案内の印象（講演回数）

c 受講テーマに対する関心

講演のテーマに関しては、7割強の回答者が「関心がある」と答える一方、回答者の約四分の一が「どちらでもない」または「関心がない」と答えている。分割表分析上での分布差はないが、年齢層で60歳から64歳の回答者において、関心の程度がわずかに下がるようである（「関心がある」=64.9%）。なお、性別による回答の分布の差は見られない。

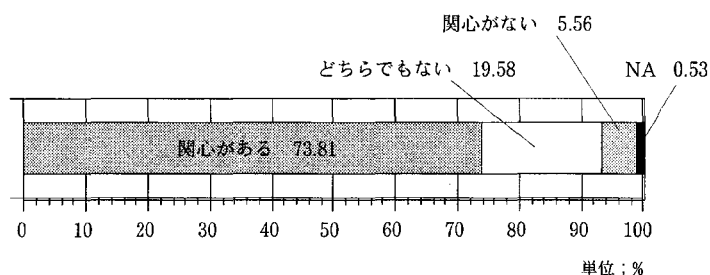


図25 事業案内の印象（受講テーマに対する関心）

d 受講定員

「30名」の定員に対しては、6割弱の回答者が「適当」とするが、その他の4割の回答者は「少ない」と感じたようである。「多い」とした回答者はわずか1名で、三択であることを考えると、多少、不満の混じった反応と読むこともできる。なお、分割表分析において確認すると、年齢層において分布の差が生じ、60歳から64歳の回答者において「少ない」との回答が多くなっている（50%）。

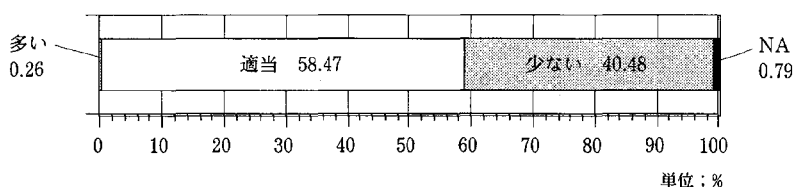


図26 事業案内の印象（受講定員）

e 自由時間

自由時間についての感想は、ほとんどの回答者が「適当」と答えている。ところが、案内リーフレット上で「自由時間」の表記は1カ所にすぎず、その自由時間には総合博物館等の見学も準備されている記載になっている。このようなことから、自由時間についての感想をたずねるにあたっては、少々説明が不足していたところがあったのかもしれない。

なお、後で見る参加者アンケートにおいては、自由時間についての不満が少なからず観察されている。

## シニアキャンパス報告

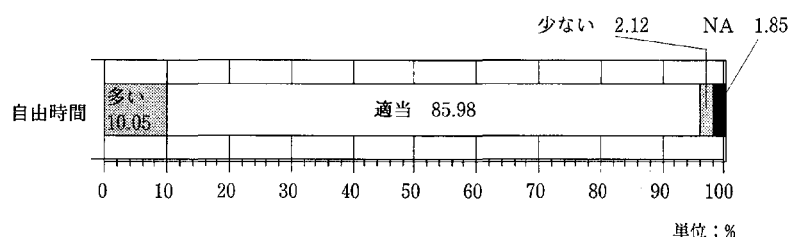


図27 事業案内の印象（自由時間）

### 7) 要望（自由回答）

以下、「〈シニアキャンパス〉と同様の機会がある場合のご要望をおうかがいします」としてたずねた3つの自由回答について、それぞれ要約を記載する。

#### a 「学習内容として、具体的にどのようなものを希望されますか？」

表20 希望する学習内容

1) 歴史関係 67 歴史 48 歴史（世界） 6 歴史学 2 考古学 2 美術史 5 科学史 2 政治史 1 宗教史 1	9) 健康・生活 45 老後の生き方・健康づくり 35 生き方、心の健康 4 福祉／援助論 6	16) 自然 6 自然／自然体験 6
2) 政治・経済・法律 44 経済／経済学 25 政治 12 法律、司法 4 行政 1 国際政治／外交 2	10) 時事問題・社会問題 18 社会問題、時事問題 17 戦争 1	17) 心理／対人関係 13 心理学 8 カウンセリング／心理分析 3 人間関係、コミュニケーション 2
3) 経営・資格関係 4 経営／企業／資格取得 4	11) 教育 11 教育学 1 教育問題 6 理科（教科） 1 数学（教科） 1 社会（教科） 1 地理（教科） 1	18) 医学関係 15 薬学 1 医学／患者学 11 精神医学 1 栄養学 2
4) 言語／語学 9 言語（日本語以外） 4 言語（日本語、古文） 3 英会話／翻訳 2	12) 社会参加／学び／自主的活動 25 高齢者の学び、社会参加 13 生涯学習 2 レジャー、レクリエーション 2 ボランティア／NPO 6 男女共同参画 2	19) 社会科学・人間学 16 専門家の話（バイオグラフィー） 5 人間学 4 文化人類学（民俗学） 4 女性学 1 老年学／老人学 2
5) 文学・哲学・宗教 52 文学（古典含む） 30 宗教／宗教学 9 哲学 9 思想 2 美学 1 倫理学 1	13) 科学・技術・自然科学 39 コンピュータ／IT 5 自然科学一般、先端技術 11 地震学 1 気象学 1 植物学 1 宇宙／天体観測 3 生命科学 1 生物学、動物生態／バイオ 6 未来社会 3 地震／災害 2 理系のテーマ 5	20) 音楽・芸術 9 美術／工芸 7 音楽 2
6) 国際交流／国際社会 16 国際社会、国際平和 11 国際交流 4 民族／人種 1	14) 京都・京都大学 22 京都大学について 5 京都に関連したテーマ 17	21) その他希望 20 専門的なもの 11 教養的なもの 9 在学中の学生の話／意見交換 3
7) 環境問題 16 地球環境／環境と生活 16	15) 文化・くらし・地域社会 22 コミュニティ、景観 7 文化、文化活動 15	(以下、各1) 京大に関することばかりでなくてよい 一つのテーマを掘り下げたもの 課題について学びあえる内容 博物館の資料解説 大きなジャンルを角度を変えて繰り返し 産学共同の事例研究 過去と未来についての公論 学びたい学部を選択できるもの ノーベル賞受賞者の話 大学が期待する学生像 内容が多岐であるほどよい JTBからの話があってもよい 教育学研究科のゼミへの参加
8) 文化 16 文化 15 常識 1		



b 「学習形態（今回は講演の形態）として、具体的にどのようなものを希望されますか？」

表21 希望する学習形態

希望する学習形態（その他）

- ・講演（104）
- ・講義、授業（43）
- ・ディスカッション、意見交流（37）
- ・ゼミ、グループ学習（31）
- ・ワークショップ／実習・実技／ケーススタディ（30）
- ・フィールドワーク、現地研修（18）
- ・討論、討論会、ディベート（16）
- ・見学、見学会（13）
- ・シンポジウム、フォーラム、トークセッション、パネルディスカッション（10）
- ・研究、共同研究、研究発表会（7）
- ・レポート、論文提出（6）
- ・実験、観察（5）
- ・ネットでの授業、通信教育（3）
- ・宿泊を伴うプログラム、研修旅行（3）
- ・通年の授業、講演（3）
- ・資格付与、単位取得（2）
- ・その他（各1）

夏期集中／シリーズ化／参加者のサークル形成／視聴覚教材を使った授業

\* 回答中、複数の希望項目があった場合、重複してカウントしている。

\* 「フィールドワーク、現地研修」は、野外（屋外）の意が示されているものに限った。

c 「その他、〈シニアキャンパス〉に対するご要望があれば、ご自由にお書き下さい。」

①. 「大学一般に対する期待や思い入れ」（該当数11／回答総数216）

様々な事情で大学進学を断念したが、大学で学ぶことに対する希望を持ち続けてきたことを表しており、過去に得ることのできなかった学習・教育経験を「シニア」になった現在「取り戻す」「新たに経験する」ことへの意志の表れといえる。例えば「大学には行きたかったけれど、家庭の事情でいけませんでした」「高校しか卒業していないので大学教育・生活等かねてより経験したいと思っていました」「幼い頃に戦争で両親を亡くし好きだった勉強も家庭の事情でその上に行けなくても自分なりに色々やって来ました。この年になり改めて大学にて講義が聞けるなろと思ひ申し込みをしました」などの回答に、大学で行われている教育に対する強い思い入れを見ることができる。

②. 「京都大学自体に対する期待や思い入れ」(20/216)

「1」とは異なり、京都大学そのものに対する期待や思い入れを表現しているものである。「若い頃から京都大学に対する憧憬の念が、リタイヤした現在もありました」「京大キャンパスで学べるとしたら、飛び上がる程嬉しい!!」「憧れの京都大学へ足を踏み入れることの嬉しさ」「一度有名なキャンパスをくぐってみたい」など、「有名大学」としての京都大学に対する憧れの念は強い。また、家族が京都大学に関わりをもっており、そのことをひとつの応募動機として挙げるものや(「私の兄が京大ひとすじで只今は名誉教授……」「息子が京大(法)を卒業した関係で、時々キャンパスに伺ったこともあり……」)、東京大学との比較から京都大学の魅力を語るもの(「京大は東大よりも社会に対する影響力は、非常に高い大学であると思います」)もある。なお、この20件以外に「京都大学」と冠することで、シニアキャンパスは単なる京都大学のPRではないのか、という批判も存在する。「“京都大学について学ぶ”については、あまり魅力を感じない」「プログラムを見ると、京都大学のPRの如きかなと思ってしまう」「『京大について学ぶシニアキャンパス』とある様に、何か京大に入学させたい親(人々)についての説明会の様な講演内容になっていて、『ズレ』を感じるのは、私だけでしょうか?」。

③. 「専門的な内容への期待」(8/216)

「1」や「2」とも関わって、「専門的な内容」への期待の表明。「京都大学と言いますと優秀な学生、専門のレベルの高い講座、研究なされている学問の場と想像します。……色々の専門の先生方から、深い知識、お考えなど聞く機会があればと望んでいます」「内容の半分は専門的分野から選択してもらいたいと思います」「シニアでも専門的に学んで社会に役立ちたいと思っているのです」「現在魅力的なテーマを追求しておられる研究者や教授等の方々が大勢おられると存じます」。京都大学をはじめとした大学でそれぞれの専門分野を研究している研究者の成果に触れることへの期待、またそこで触発されるであろう自身の知的好奇心を満たすことへの期待といえる。

④. 「学習に対する意欲の表明」具体的な事柄(33/216)、抽象的(35/216)

これらの回答は、主にシニアキャンパス受講を希望する人々が自由記述として記入しているので、何らかの形で「学習に対する意欲」が表明されていると考えられるが、その中でもより直接的な形で表明されたもの。具体的な事柄を表明しているものとしては、「実業でもNPOでも参加のためのヒント・ガイドとなるような授業」「火星に水はあったか? 生物がいたのか? 田中さんは何を発明したのか? 宇宙に果てはあるのか? ヒトはいつ、猿と分かれたか? 狂牛病とは? etc」「教育問題」「健康増進に役立つ講義、医学領域の話題のテーマ」「パソコンのホームページの作り方を教えるとか、歴史学の社会探訪に案内するとか」「失業問題」「高齢社会への移行に伴う様々の課題、特に地域に於ける対人関係と文化活動に的を絞った実践プログラム」「防衛問題や中台問題」「歴史、宗教関係」など多岐にわたっている。このような多岐にわたる具体的な学習内容も、興味や関心のある事柄を列挙したものと、職業・地域・家庭などの日常生活の経験から導かれる切実な問題として表明されたものに分けることが

できるのではないか。

これに対して抽象的な形で「学習に対する意欲」を表明したものは、「ここで一層ジャンプ。持てる力を社会に発揮したい」「気持ちだけは、やりたい事が山ほどあるが、その欲望を整理しつつ、自分自身を育て、社会の荷物となる日を少なくし、出来る事なら、少しはお返しが出来ないものだろうか?」「体力、集中力が低下する50代半ばではありますが、勉強したいとか、勉強することのおもしろさが、若い頃以上に強くなってくる時もあるような」「知らなかったことを勉強したく思っています」「最近に加齢に比例して勉強の意欲や社会への関心がupしてきました」「今後の人生を社会参画型で生きて行く参考になれば嬉しい。又視野を広げるためにも多くの人と関わりを持ちたい」などの回答がある。上記の「具体的な事柄」と比較すれば、この抽象的な形で「学習に対する意欲」の表明は、何を学ぶか、ということ以上に、学ぶことそのものへの意欲の表明といえるのではないか。

⑤. 「他の学習機会への不満」(8/216)

以前や現在、他の学習機会に参加したが、それでは不満、もの足りないというもの。この「不満」の表明は、「1」と関わらせて解釈すれば、他の学習機会との比較の上で、大学が提供する学習機会への期待の表明といえるかもしれない。「今まで生涯教育の講座を何度か受けたことがあります、講師の方の一方的なお話でおわってしまうことが多かった(ほとんど)です。聞いて終わるだけでは、せっかく集まった方々のすばらしい情報も聞くことが出きず、お茶の時間のコミュニケーションもなく、そのあとすぐに忘れてしまうような時間を過ごすだけではほんとうにもったいないと思っていました」「いろいろな市の催し物等にも出席したが、年齢的にまだ老人には遠く若者には当てはまらない年齢で中途半端だった」「会話スクールやカルチャーセンター、市の公開講座よりはもう少しアカデミックであり実用的でない(“会話を身に着ける”とかいう身体的なものではなく)、勉強のための勉強というか役にも立たないけどただ学んでいることだけが楽しいという機会をシニア(?)にも提供して(特に国立大学であればこそ)いただきたいと思います」。

⑥. 「リタイヤ後の生涯学習」現在(13/216)、将来(5/216)

「リタイヤ後」の活動として生涯学習に注目しているもの。現在すでに「リタイヤ後」であるものと、将来に備えてというものに大別できる。前者は、「定年退職後はもっとバラ色のはずでした。約2年で頓挫しました」「今年2月末で59才で退職し昔から何らかの型で勉強したく思っており、その手始め、今後のために募集に応募しました」「退職して本当に自由な時間が持てるこれからこそ、マイペースで束縛の少ない学習をしてみたいという思いです」「人生で定年退職後は自由な時間が非常に多くありますのでシニアキャンパスのこのような企画には大賛成です」などがある。また後者には、「団塊の世代が第1線を退く、5、6年先を見据えたシニアキャンパスの試みは、地域に開かれた自由闊達な大学として存在を表す素晴らしいものと思います」「振り返れば、仕事と子育てに邁進した日々であった。今50才を過ぎ、第2の人生を考えると、今までの自分のために成し得なかったこともある」「17年勤めた会社をこ

の3月末でリストラに成ります。ぜひ参加して何かをつかみたい。光をみつけない、そんな気持ちで応募しました」などがある。

#### (4) 参加者アンケート結果の概要

##### 1) 回答者のプロフィール

a 性別 回答者（N＝33）の性別内訳は、女性20人、男性13人である。

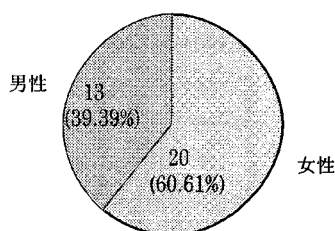


図28 性別比率

b 年齢層 本調査では、数値として年齢をたずねるのではなく、「50代」、「60代」、「70代以上」の三択として年齢層をたずねている。

表22 世代構成

	度数	パーセント
'50代	14	42.42
'60代	15	45.45
'70代以上	4	12.12
合計	33	100.00

##### 2) 学習経験

応募者アンケートの結果において、本事業の応募者の社会活動経験が高いことが示されたが、本調査では焦点を絞り、参加者の生涯学習経験を複数回答でたずねた。なお、結果の比較を目的に、選択肢の項目は、1999年12月に実施された「生涯学習に関する世論調査」（総理府）中の質問「あなたは、どのようなかたちで生涯学習活動を行っていますか」における選択肢をそのまま用いた。

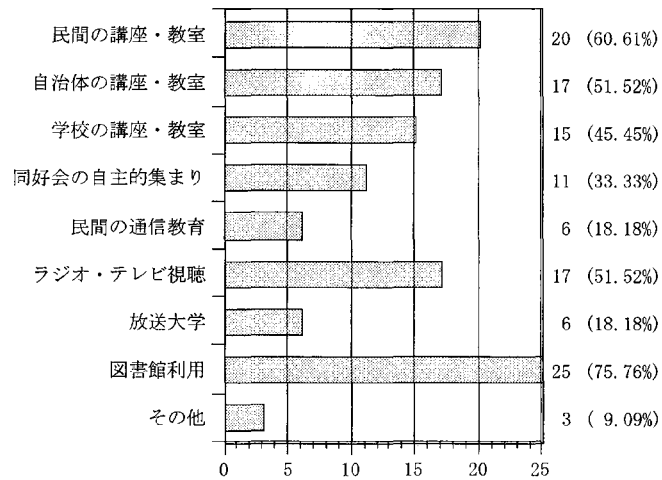


図29 経験した生涯学習活動 (MA)

参加者が過去に参加した生涯学習活動は、「図書館の利用」が最も高く、ついで「民間の講座や教室への参加」となる。「自治体の講座や教室への参加」、学習としての「ラジオやテレビの視聴」は約半数の参加者が経験ありとしており、「同好会の自主的集まり」は約3割の参加者に経験がある。

一方、比較的経験が少なかったのは「民間の通信教育」、「放送大学」であり、この結果は、応募者アンケートの結果（「通信教育」の少なさ）とも符合する。

次に、本調査のこれら結果と世論調査の結果を比較してみると、同様の質問にもかかわらず、かなり異なる結果となることが示される。

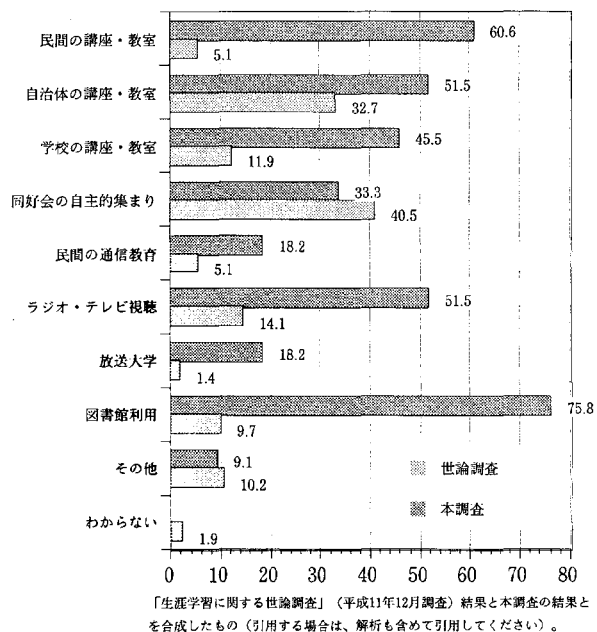


図30 経験した生涯学習活動 (世論調査との比較)

## シニアキャンパス報告

上図において明らかなように、「図書館利用」と「民間の講座・教室」における、両調査の結果の違いは大きく、「同好会の自主的集まり」を除くその他の項目についても、本調査の回答者（参加者）の学習経験の高さは歴然としている。

ただし、世論調査の質問は、「過去1年」において行った活動を調べたものであり、「これまでの経験」をたずねた本調査とは、測定対象が異なり、一概に比率の高低を言うことはできない。ここでは、世論調査が想定する一般的母集団（つまり一般人口）との傾向の違いを見るにとどめるべきである。

### 3) シニアキャンパスに対する評価

事業の参加者に対し、参加後において感じた満足、不満足をたずねた。質問は「その他」を含めた13の項目を、それぞれに無制限の複数回答で選択してもらった形であり、満足項目、不満足項目も同じ項目を用いている。

#### a 評価の全体傾向

「満足」した項目として参加者が選んだ項目の個数は、不満足に比べて明らかに多くなった。満足項目については、回答総数232、一人当たり回答個数7.0（13項目中）であったのに対し、不満足項目では、回答総数52、一人当たり回答個数1.6である。

さらに、満足／不満足を含め、シニアキャンパスの3日間の充実をたずねた質問においても、参加者の全員が「充実したものだった」（87.9%）、「まあ充実したものだった」（12.1%）と評価し、「それほど充実したものではなかった」及び「充実したものではなかった」の回答者はいない。まずもって参加者の多くは、事業の終了後にあって、シニアキャンパスに強い満足を感じたことは間違いない。

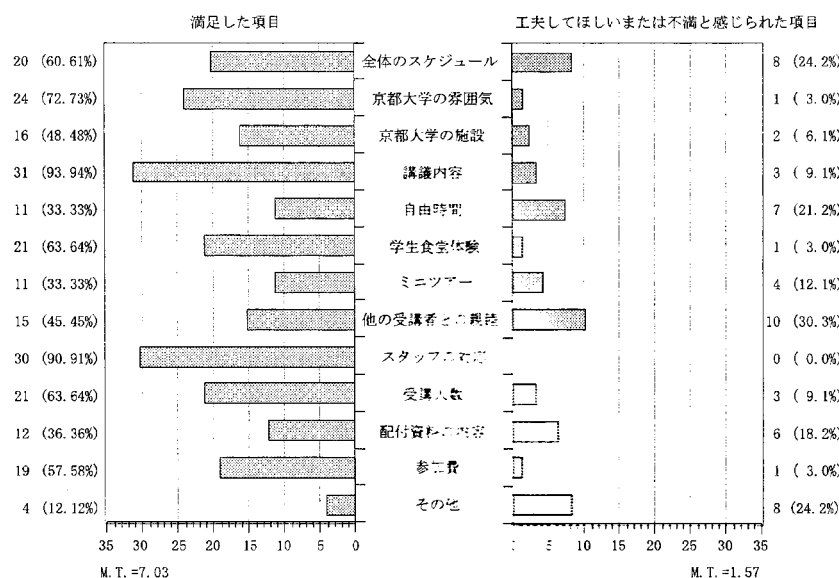


図31 シニアキャンパスに対する満足と不満足

表23 シニアキャンパス3日間の充実

	度数	パーセント
充実したものだった	29	87.88
まあ充実したものだった	4	12.12
それほど充実したものではなかった	0	0.00
充実したものではなかった	0	0.00
合計	33	100.00

## b 満足の内容

満足した項目を個別に見ていくと、まず「講義内容」への満足が非常に高い（93.9%）点が目につく。続いて「スタッフの対応」（90.9%）、さらに「京都大学の雰囲気（72.7%）」と続く。

これら満足項目に対する参加者の反応の構造を知るために行ったクラスター分析の結果からは、「講義内容」と「スタッフの対応」の項目の距離が非常に近く、この2つの項目は、どちらか一方ということではなく、両者あいまっての満足を形成しているようである。また、全体の構造で見ると、「講義内容」「スタッフの対応」「京都大学の雰囲気」「受講人数」といった、満足として選ばれることの大きな項目が一つのクラスターを形成しており、次に「京都大学の施設」「参加費」「学生食堂」「スケジュール」といった、場や条件に関する項目が一つの固まりとなっている。そして3番目のクラスターとして「ミニツアー」「配布資料」「自由時間」「親睦」「その他」の、オプション的項目が観察される。

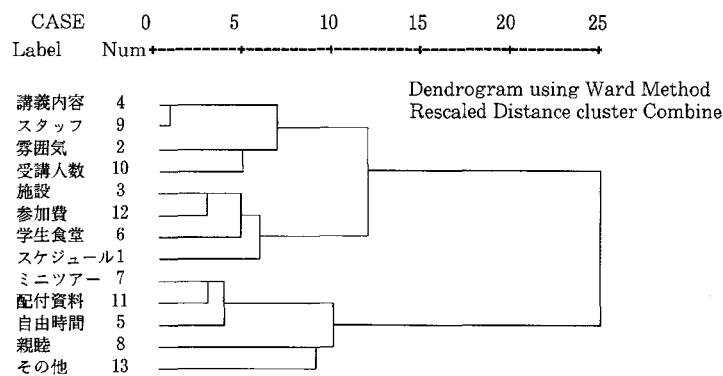


図32 満足の内容に関するクラスター

## c 工夫してほしい／不満足の内容

一方、工夫してほしい／不満足の内容について見れば、「他の受講者との親睦」（10人、30.3%）がもっとも多くなり、「その他」（8人、24.2%）、「配布資料の内容」（6人、18.2%）と続く。

満足項目と同様に行ったクラスター分析においては、度数そのものの小ささから、明瞭な構造は見いだせないが、「自由時間」「全体のスケジュール」「親睦」「その他」といった、時間配

分やスケジュールに関係する項目と、他の項目が異なる不満足を形成しているようである。うち、「親睦」については、他の不満足との距離が遠いが、クラスターの所属から見て、帰宅時間の関係から参加できなかった人の不満足ないし、自由時間における親睦を図るプログラムの不十分さが現れているのかもしれない。

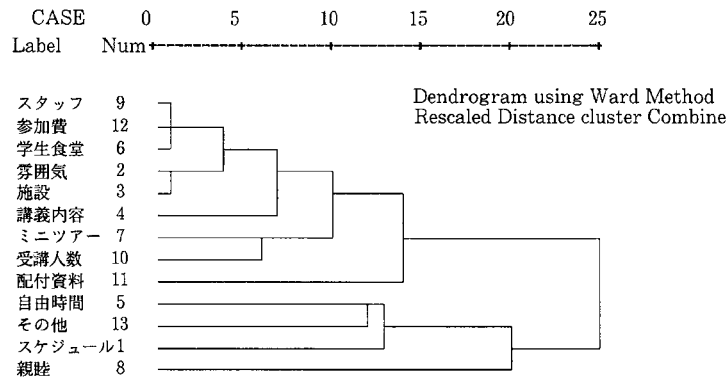


図33 不満足の内容に関するクラスター

#### 4) 今後のシニアキャンパスに対する希望

「今後、〈シニアキャンパス〉と同様の機会があるとすれば」という仮定を置いて、希望する学習形態と学習内容が無制限の複数回答でたずねている。

##### a 学習の形態や条件についての希望

今後希望する学習形態・条件については、「今回と同じような、講義中心の形態がよい」「複数の授業から選択できるとよい」を選択する参加者が66.7%と最も多い。ついで「一般の学生とともに学習できるとよい」(45.5%)と高くなる。一方で、「調査・研究」「大学祭などのイベント参加」は希望が低いようである。

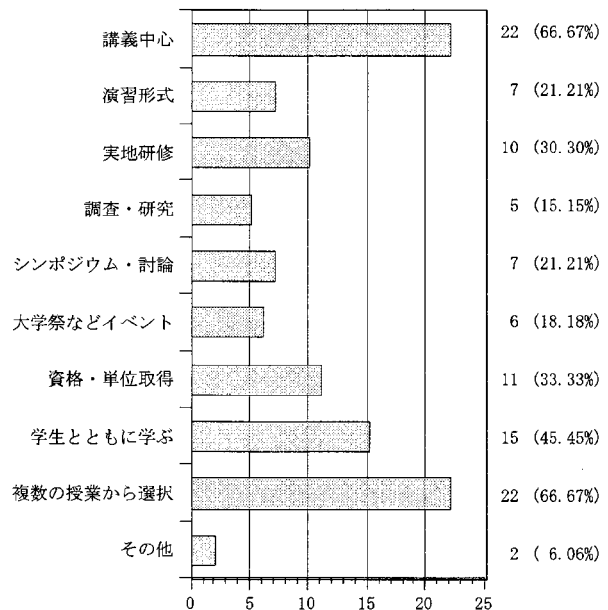


図34 希望する学習形態・条件



b 学習内容についての希望

続いて希望する学習内容をたずねているが、ここで用いた項目は先にも引用した「生涯学習に関する世論調査」（平成11年12月調査）における、「してみたい生涯学習の内容」についての質問と同じ選択肢であり、比較が可能である。

図35に明らかであるが、世論調査結果において高い希望が示される「趣味的なもの」は、本調査結果においては非常に低くなっており、その逆に、世論調査では2割程度の回答者しか希望しない「教養的なもの」が本調査結果においては飛び抜けて高くなっている（97.0%）。その他の項目においても、同じ質問とは思えないほど分布が異なっており、これを調査対象者の違い（「全国の20歳以上の者」と「シニアキャンパス参加者」）だけで説明できるかどうかはわからない。

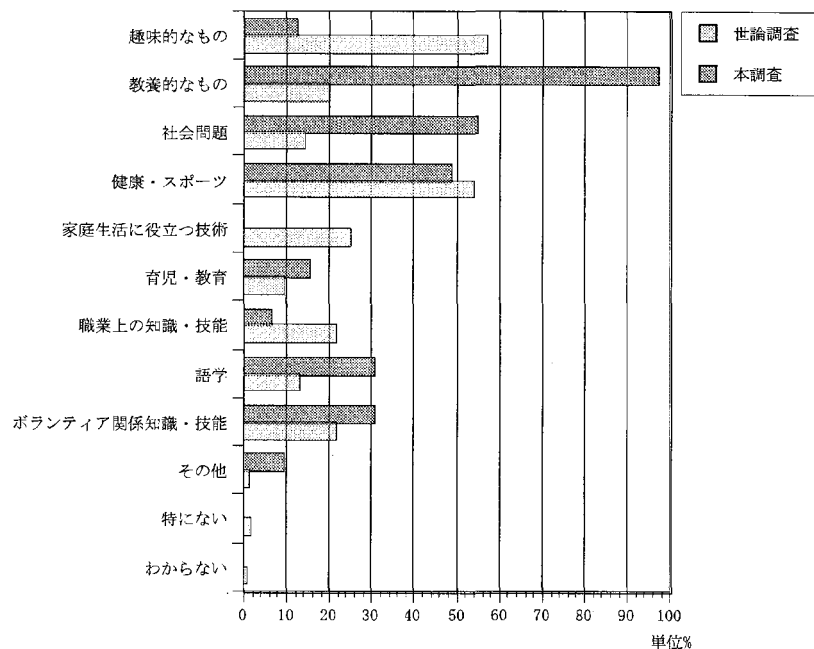


図35 希望する学習内容（世論調査との比較）

## シニアキャンパス報告

### (5) ディスカッション記録

シニアキャンパスを終えて

あっという間に終わったシニアキャンパスの3日間をグループごとに振り返っていただいた。人生経験も学びの経験も人それぞれであるが、シニアキャンパスに関心と期待を寄せて参加してくださったみなさんは、この3日間をどのように味わっていただけたであろうか。また、シニアキャンパスの経験を、これからの学びにどのように活かしていただけるのだろうか。6グループに分かれて活発に交わされたディスカッションの記録を読み解き、テーマごとに一つの流れをつくってまとめた。

3日間、お疲れさまでした。まず、今回のシニアキャンパスに対する全体的な感想からお聞かせ下さい。

a：なんといっても、子どもの頃からの憧れの京都大学で学べたことがうれしかった。どの講義もととても楽しかったし、内容的には十分満足できました。講義は分かりやすく、もっと聞きたいと思いました。

b：私は、シニアキャンパスに参加できたことが、宝くじに当たったよりも嬉しかった。年齢の節目節目に旅行などしてきましたが、今回、新聞記事からこんな機会を得られたことに感動しました。

c：京都大学の雰囲気を感じつつ、学ぶことができたと思います。理論だけで理解するのではなく、体全体でわかる感じといいですか、精神的な解放を味わった気がします。妹に誘われてなんとなく来たけれど、ついて来て本当によかった。

d：もっと多くの人に体験してもらいたいと思います。来年もぜひやってもらいたい。このような機会を、より多くの人に開いて

ほしいと思う反面、せっかくこのように始められたのだから、継続性のあるものにしていきたいという気持ちもありますね。

e：そうですね。もうこれで終わりというのではなく、同期会みたいなものもやりたいし、一つのスタートとして考えたい。

ありがとうございます。ところでみなさんは、シニアキャンパスの企画をどのようにお知りになったのでしょうか？また、どのような点に惹かれて応募されたのでしょうか？

f：きっかけはテレビからです。2年前に第二の勤めをやめ、テレビを見るだけの生活を送っていました。高血圧症ということもあり、本格的なことは難しいけど、これらなどと思い、応募しました。

g：私は、子どもが高校を卒業して、自分も何か勉強ができないものだろうかと思っていたところに、新聞でこの企画を知り、「3日間ぐらいなら学生ができるかな」と考えて、姉を誘って応募しました。今回は、京都大学だからというのが大きかったと思

います。「京大」でやるっていう、それを聞いただけでもう、メモとって電話していましたね。ものすごい大学がやるんだっていう感じでしょうか。京大っていうのは、もっともっと遠いものだと思っていたんですよ。それに、進学を断念した経験があって、ちょっと引きずっていましたが、この機会に参加して心の穴を埋めたいというのも動機のひとつでした。

h：新聞でシニアキャンパスの記事を見て、「あの京大が動いている」という感じを強く受けましたね。

i：たしかに「京大」はインパクトありました。それに、今回の企画は、他の私立大学がよくやっているような公開講座とは異なり、「大学生活を味わう」、「京都大学を知る」というコンセプトであり、そのことにも興味をそそられました。「学食体験」や「京都大学の紹介」、「ミニツアー」などというプログラムは、他ではちょっと見られない。暇があってお金がある高齢者をターゲットとした企画とはひと味ちがうぞって感じましたね。

j：その一方で、他とどのように違うのか、どういう人に参加してほしいのかということが漠然としていて、メッセージがうまく伝えられていない感じもありましたね。悪くいえば、「京都大学」のブランドだけで参加者を募っているような印象も受けました。もう少し一般のカルチャーセンターや他大学の公開講座と、どこがどう違うのかを明確にした方がいいと思います。

k：「京大」の魅力もありましたが、

「JTB」というのも、とても魅力的に感じました。旅行が大好きですし、京都に行って学ぶという企画にも惹かれました。

今回の企画に魅力を感じていただいて、ありがとうございます。では次に、各論といますか、よかった点、よくなかった点について、感じられたことを教えてください。

l：講義にはとても満足しました。総長や副学長の話が聞けたということだけでも参加したかいがあったと思います。

m：辻本先生の教育史のお話が最初だったためか、とても心に残りました。お話のしかたもうまいし、方法論のお話には、知識の多少ではなく、大切なのは「生き方」を身につけることだという点で、とても共感できました。

n：東山先生のお話にもひきつけられました。天性なのでしょうね。人の心をひきつける言葉をもっていらっしゃる。アドリブもとてもよかったです。

o：講義はされませんでしたでしたが、前平先生が、参加者と話されるとき、参加者の目線にあわせてかがんで話されているのが印象的でした。京大の教授とか京大生といえ、  
「雲の上の人」で、話などしてもらえないという感じがありましたが、先生の相手を尊重する姿勢、態度に触れて、京大のイメージが変わりましたよね。

日程や企画の内容についてはいかがでしょう？

p：今回は金、土、日という日程もよかったと思います。

q：私は平日の方が参加しやすいですね。それに、連続ではなく、1週間に1回とかの方が参加が楽になると思います。

r：3日のコースや1週間のコース、あるいは半年や1年のコースなど、参加の形や講義内容を選ぶようにしていただけたらもっといいと思います。そこまでは急にできないのかもしれませんが、シニアだけで囲われるのではなく、一般の学生といっしょに学べる形がほしいと思いました。知識では学生にかなわないかもしれませんが、社会はこうだということを学生と意見交換したり、サークルや本当の講義を体験するなど、学生生活の中に入っていきたかった。そうすればもっと学生の気分を味わえたかもしれません。

s：たしかに、一回だけの広範なテーマでの学びよりも、得意とするテーマを定めて、それを軸に企画を立てた方がよいのではないのでしょうか。

t：「シニア限定」ということについて感じたのですが、こういうふうに束ねていただいたからこそ参加しやすかったのではないかと思います。他大学の講座に通ったことがありましたが、年齢のことがとても気になり、自分が受け入れられているのかどうか不安でした。実際にはさほどではなかつ

たのですが、ここには、世代も近いし、今の自分よりも向上したいという気持ちにあふれた人たちがいる。10歳上でも10歳下でも、ここでは年齢のことを忘れることができました。

今回はゆるやかな形で「班」を作らせていただいたのですが、この点はいかがでしたでしょうか？

u：私は班分けはとてもよかったと思います。他の班の方のことはあまりわからなかったとはいえ、班の中では何でも言える雰囲気があったし、実際、言ったり聞いたりして、とても親しくなれました。

v：私は班分けはいらないと思いました。過保護すぎだし、スタッフも多すぎる。

w：休み時間が2時間もあって、長過ぎた。その時間を講義にまわしてほしかった。

「シニア」という言葉に抵抗を感じたりしますか。

x：感じます。実は応募にも戸惑いを感じました。

y：シニアはそんなに年寄りではなく、まだまだバイタリティがあります。

z：私も最初は抵抗を覚えました。でも辞書で調べたら、年長者という意味以外にも「最上級」という意味もあり、なんとなく納得しました。

a' : 年を重ねてからの方がよくわかることも多いですね。

b' : 私には孫が二人いますが、自分が年寄りだとは思っていません。とは言っても、体の方の衰えはやっぱり感じますので、運動方法や栄養摂取方法、健康維持方法などに関する講義も聴きたいと思っています。

少し話題を変えますが、みなさんはこれまで、どのような学びの経験をされてこられましたか？カルチャーセンターなどを利用された方も多いと思いますが。

c' : カルチャーセンターには通ったことがあります。自分の興味ある講座を選んで、会社帰りに行くという形ですね。

d' : カルチャーセンターには行ったことはないですが、専業主婦でしたので、PTAなどの仕事はよく引き受けてきました。新聞社とも連携して学校でいろんな先生の話の聞いたり。今は老人会の役員として地域で活動しています。

e' : 私はスポーツクラブに通っていて、そこには20年来の仲間がいます。仲間どうしでダイビングに行ったり、フラダンス、フラメンコなどもしています。悩み事があったとしても、誰かが何かをしてくれる。皆が知恵をもっているから、仲間との交流の中でそれを共有することができるし、愚痴も含めて本音で話し合ったり、励ましあう場があります。

f' : 地域の活動は、下駄履きで、お金がか

からないので長く続けられますね。年を取ったら地域で面倒を見てもらわないといけなくなるから、地域で話し合える場ができるのはうれしいことです。

g' : 私は1年前から英会話を習いだし、今はそれに夢中です。というのも、アメリカにステイしたいというのが私の夢だからです。海外旅行の経験が直接のきっかけになりましたが、けっして学ぶことが嫌いでない自分に気づいたことが大きかったのだと思います。もう、ステイの夢も、夢でないところまで近づいています。

h' : 私は夫を亡くしてから、だらだらした生活をしていたのですが、子どもに「ボケんといてや」と言われ、このままではダメだと思い、夜間高校に通いだしました。学んで初めてわかったことですが、それまで「知らん」「わからん」で済ませていたことが、「これも知っている」、「あの人も知っている」と、知っていることがつながりだしたのです。そのことがほんとうにうれしい。今、私はその幸せをかみしめています。

i' : みなさんの学びの経験を聴いていて、たいへんな刺激を受けています。もっと早く、どうしてこのような場がなかったのでしょうか。

私は50歳になったばかりなのですが、更年期障害からか体調が悪くなり、ここに来るまで、「これからどうしたらよいのだろう？」と大変な不安に陥っていた。私のようなシニア1年生が、自分探しのきっかけをつかめる場がぜひ欲しいと思います。

ありがとうございました。最後に、少し抽象的なテーマになりますが、シニア世代における生涯学習について、京都大学に対する期待も含め、お考えをお聞かせ下さい。

j' : 「生涯学習」というと、一般的なイメージはまだ「社会教育」とか「生涯教育」という意味での印象が強いのと思いますね。でも、今、日本中が「生涯学習社会」を模索している中で、京都大学がこのような企画をされたことはとても大きな意味があったと思います。

k' : テレビ番組でも「生涯学習って暇つぶしやろ」って言ってましたしね。そんな意識ですよ。

l' : 決して暇つぶしではないですよ。暇つぶしなら別に学ばなくてもいい。他にいくらでもありますもの。

m' : 大げさな意味ではなく、シニアにとって「生涯学習」とは、イコール「生きること」だと思います。それがどれだけ人生を豊かなものにするか、そしてそれを社会につなげていくことで、充実感や生きる実感を味わえることができると思います。それはなにも格好をつけて「社会貢献」と言っているのではなく、学びが生きることと重なっていく感覚です。このあたりは若い人にはわかりにくいのでしょうか。

n' : このシニアキャンパスを経験して、なんとなくこのノリでいけば、何でもできそうな気がしてきました。今回の企画で、何

でも好奇心を持って取り組みたいと思うよ  
いきっかけになったと思います。

o' : そうですね。具体的にどのようなことをという目標は浮かなくていいのですが、とりあえず「勉強がしたい」という気持ちが出てきた。思っていた願い、門が開けた感じがします。

p' : 今、私は何がしたいかといえば、もう人生も短いから、自分の生きた時代が何だったのかということを見つめて、それを総括したいと思います。そういうニーズに大学が応えてくれたらと思います。

シニアに対して学習の環境や条件を提供することって、いったい何になるのだ、という考え方もありますよね。でもそれは、若者に対する先行投資としての教育とシニアにとっての学びをごちゃまぜにしている。学校教育の発想方法でシニアの学びを考えることができない所以だと思います。一方、シニアの方も、単なる享受者であってはならないと思います。はっきりした役割像が私のイメージの中にあるわけではないのですが、これからのシニアは、社会を変えていく、あるいは社会のメンディングをする、社会の悪いところ、足りないところを補っていくような、潤滑油的な役割を果たしていけば、高齢化社会はもっと明るいものになるような気がします。

q' : そうですね。子どもも成長し、定年も間近。体にも老いを感じ始めてくる。これからいかに生きていくべきか、まさにそこにおいてこそ、学びが若い頃とは異なる意味を帯びてくると思います。その意味で、

ほんとに「知識」ではなく、「生き方」こそが大事だと感じます。そこにおいて、大学が、なかんづく京大が何をしようとするのかという点には、大きな関心を向けざるをえません。京大にはこれだけの教育環境

があるのですから、みんながもう少し使いやすい状況をどう作っていくかということはずごく大切だと思いますよ。

貴重なご意見をありがとうございました。

#### (6) 課題レポートの概要

##### 1) シニアキャンパスにおける課題 レポートの位置づけと基本データ

###### ① レポートの位置づけ

本シニアキャンパスにおいて受講後の課題レポートを設定した趣旨は、各々の参加者に、

1. 三日間のシニアキャンパスでの学びを振り返ること、
2. これまでの経験や知見を踏まえ、京都大学に対して意見や提案を発信すること、

の二つを期待した点にある。

主催側にとって同レポートは、シニアキャンパスの生涯学習的意義、本企画の成否、そこで残された課題、今後の京都大学への社会的期待、などを参加者の生の声から明確に捉えるための貴重な情報源である。と言える。

###### ② 課題、および回答・返送方法

上記の趣旨をもとに、次の二つの課題を設定した。

第一の課題は、四つの講義から一つを選び、それについて論ずることを求めるものであった。第二の課題は、「今後、京都大学が『社会に開かれた大学』として発展していくためにはどのようにすればよいか」について、参加者の意見を求めるものであった。

参加者には、京都大学の所定の様式のレポート用紙を配布し、直接手書きで記載するか、ワープロ書きで出力したものを貼付するか、いずれかの方法で、生涯教育学研究科宛に郵送していただくものとした。

###### ③ 基本データ

- A. レポート提出総数 33本（参加者全員）  
B. 一人あたりの提出枚数（片面を一枚として換算）

1枚	1人
2枚	14人
3枚	10人
4枚	7人
5枚	0人
6枚	1人
計	33人

C. 課題1の4つの講義に関するレポートの内訳（講義順）

辻本先生 9本

竹内先生 8本

尾池総長 5本（うち1名はタイトルのみ記載）

東山副学長 11本

2) 講義別のレポート内容の概略【課題1】

① 辻本雅史教授の講義

本講義を選択した参加者は、歴史学から現代教育の課題にアプローチするという講師の方法論に新鮮さを感じ、異口同音に「目が開かれた」と述べている。「学問は方法論で決まる」との言葉に、「まるで新生が最初の講義に臨むような気分の高揚を感じた」との声もある。同様に、多くの参加者が取り上げているのは、寺子屋での「学びの身体性」である。その有効性や意義が、近代の学問や現代の教育との対比において、肯定的に受け止められている。また、今日の深刻な教育問題を解決する手がかりとして注目されている。

講義のタイトルについては、「専門分野と京都大学を無理矢理結びつけたのでは」という事前の予想を覆して、講義内容が「予想外に面白かった」との感想があった。講師については、「受講生に対し真摯に向き合い、シニア向けと妥協されない誠実なお人柄」「ユーモアあふれる穏やかな語り口」「懇切丁寧なプリントの配布があり、記憶面の衰えを自覚するシニアには大変ありがたいご配慮と感激いたしました」などの評価の声、さらには、講義直後の懇親会で身近に話す機会を得たことを喜ぶ声もあった。

② 竹内洋教授の講義

講義のタイトルに「隠れたカリキュラム」という学術用語を用いたことは、一方では「難しい話では？」との不安を生んだが、逆にそれが講義内容への期待感につながった。また、講義に先立ち、講師の著書を読んだことのある参加者が複数いた。ある参加者にとっては「最も期待していた講義」であり、この講義を受けられたことが結果的にも「シニアキャンパスでの最も大きな収穫」と受け止められている。

講師については「興味深い話を、大変わかりやすく講義していただいた」「時間がたつのも速かった」「京都大学と東京大学の違いや京大のやわらかい面がわかった」などの感想に加え、「もう少し深めた話をしていただいても良かった」との声もあった。

講義内容としては、建学の経緯やそれに基づく学風の違いにも触れながら、京大と東大を多面的に比較したアプローチが、参加者の興味を引き出している。他には、学生気質などに見られる「隠れたカリキュラム」の利点と難点、独立法人化の中での京大の今後の発展への危惧が、共有されている。「知への無償の愛」という言葉も印象的だったようだ。

③ 尾池和夫総長の講義

講師については、講義を通して将来の京大に向けた強力な「リーダーシップ」を感じたとの



声があったが、「京都大学」の話より、むしろ講師の専門とされる地震についての講義が聞きたかったと複数の参加者が書いている。

講義の前半は「京都大学」の歴史と現状、後半は専門的観点からの京都盆地の活断層と文化・産業との関わりを内容としたため、レポートの内容もそれを反映している。前者については、東大は官僚や社会のリーダー、京大は学者を育ててきたという違いへの注目、約3000人の教員が「誰一人同じ学問を研究していない」というほど多岐にわたる先端科学の追求への期待が示された。後者については、京都の豊富な水資源がゆたかな食文化や京セラなど質の高い各種産業を生み出したとのお話が、特に印象深かったようである。

これらを踏まえ、「これからも伝統ある京都大学の大学自治・誇りある自由な学風・教育研究を通じての社会貢献・自学自習の基本原則・議論を積み重ねるボトムアップによる企画リーダーシップの伝統を守り続けながら京都大学の第二の世紀のますますの大発展を」などのエールも投げかけられた。

#### ④ 東山副学長の講義

タイトルから想像した内容とは異なったが、結果的には知的欲求が満たされたとの声があった。講師に対しては、難しい内容の話をわかりやすく説明した点、身近な話題から話に入り、講義の流れが「自然」であった点、聞き手の反応を見ながら話を進め、時折ユーモアを交えた点などの点で、「話に聞き惚れた」「時間が短く感じられた」という。これらは、「聞き上手は話し上手」「話術」と同時に、「臨床心理学のプロフェッショナル」ならではの資質と受け止められ、その「人間性の深さや視野の広さ」に感動する声もあった。

講義では「臨床心理学は、原因と結果で考えない」「正しいことは何通りもある」「悩みが人格を大きくする」「人生は矛盾と錯覚の世界である」「人生はすべからずピンチとチャンス繰り返してである」「悩みの意味を考えることが大切である、悩みの意味を理解した時、考えが修正される」などの言葉が共感を得ている。参加者は自らの経験知や日常生活と関わらせ、また今後の生活や生き方の指針として受け止めた。また、講師自身が京大内で経験した過去のエピソードから、京大の「自由な学風」を感じたとの声もある。

#### ⑤ 全般的なレポートの論述のしかたについて

辻本教授の講義を選んだ理由に、自らが学校教育の現場にいた（いる）ことを挙げる声が複数あり、その多くは「身体性」に注目している。全体としての論述方法は、講義内容を自分のノートから再生し簡単なコメントをつけたもの、講義が面白かった理由を講義内容に触れながら整理したもの、講義の中で興味をもった事柄に焦点を絞って述べたもの、自分の意見を基調に講義内容を付加したもの、印象に残ったポイントから今後の自分の学習課題を導き出したものなどが見られた。

竹内教授の講義については、京都大学と東京大学を多面的に比較する中から、京都大学への共感や愛着を一層抱き、京都大学や京大の学生・出身者への今後の期待を示し、温かいエールを送る、という書き方のレポートが目立った。

尾池総長の講義については、京都大学と京都の地形の両者に言及するものと、片方の論点に絞って書いているものとに分かれる。両者の接点がうまく見いだしにくかったことが、講義内容への（ご専門の話をして欲しかったとの）要望にあらわれたと見られる。いずれの場合でも、これまでの自分の経験や関心と結びつけながら、講義内容に言及し、京都大学や京都の土地柄への愛着を改めて示している点が、共通している。

東山副学長の講義については、全体として、考えを書くというよりは、感想を書くというレポートが多かった。特に、自らのプライベートな経験や現在の悩みに紙面を割り、そこに講義内容を重ね合わせるもの、講師の話し方やカウンセラーとしてのあり方、その人生観などに強く感銘を受けたとするもの、臨床心理学の内容に興味をもち、今後の学習意欲を示すもの、などが多かった。

### 3) 京大が今後、「開かれた大学」として発展していくには、どうすべきかに関する意見・提案・示唆【課題2】

この課題に対する回答内容は、京大の目指すべき方向、新規事業の提案、シニアキャンパスの成果と今後の課題、の三つの柱でまとめられる。

#### a. 京大の目指すべき方向について

シニアキャンパスの実施直後に、京都大学の行政法人化が控えていたことから、参加者の問題意識も、法人化の下での大学の基本姿勢について提起するものが多かった。例えば、競争原理を取り入れた構造改革、学部間の競争、再編・統合の経営努力、現在・未来の学問のニーズについての「市場調査」、「知的財産の賢明な活用」、産学共同研究では「大学の方から産業界に働きかけ、営業努力をする」ことなどである。

他方で、従来からの京都大学の伝統や社会的役割を踏まえ、法人化の下での、「薄っぺらにならない」「長い目で見た」教育・研究の充実、「あらゆる分野のトップレベル・ハイレベルの人材を集めるための広報活動の強化」なども求められている。広報活動については、「現在進行中の研究についての紹介」「このようなユニークな研究をしているという『驚き』の紹介」、「人類の未来を見据えて、研究は今、ここまで進んでいるという、知の最先端の紹介」など、「京大の進んだ研究内容を知りたい」との要望が特に高いといえる。

これらの期待は、「教育・研究、産学連携、社会貢献、地域貢献の分野での飛躍の場として、開かれた社会的な京都大学を構築する」という表現に集約されよう。さらに、京大に限ったものではないが、大学として「人々の交流の場」「シニアパワーをフル活用、フル利用、フル発揮できる場」の提供をしてほしいとの意見もあった。

#### b. 新規事業の提案

新規事業の提案は、新機関の設置、新システムの導入、新規の講座・事業の開設、既存の事業の改編・拡大、大学施設の開放などに分けられる。

まず、従来にない新しい機関としては、学際的な「高齢社会（高齢社会における生涯教育）研究機関」、社会人対象の教育機関（夜間大学院・昼夜開講大学院）、京都大学大学院ビジネススクールなどの設置が提案されている。また社会人大学院とならぶ「高度な知識教育による京都大学独自の社会人再教育システム」として、社会人入学制度、大学院科目聴講制度・奨学金制度が挙げられているが、奨学金制度以外は、すでに本学で実施されているものであり、むしろこれらについては、さらなる制度の充実・拡大と、情報提供や広報上の工夫が求められていると思われる。

この他には、「自学学習者の質問を受け付け、学習・研究上の相談に応じる窓口の設置」、「自学学習者に特別なトレーニングを施し、研究論文の執筆を支援するシステム」の導入、あるいは「京大が認定したグループに対して研究方法を指導する」ような、新たなシステムの採用が提案されている。これらは、高度化するシニア世代の学習ニーズの実態を反映したものであり、「京大だからこそ」の質の高い、アカデミックなサポートが求められているとも、見なし得る。

次に、新規の講座・事業の開設についてであるが、①「京大ならではの」の特色を生かした講座（カルチャーセンターや各大学の一般文化講座よりやや高度で専門的な講座、京大の得意分野に特化した魅力ある講座、生涯教育学講座が他学部の媒介となり企画・運営する生涯学習講座、10年のスパンで実施する長期講座、西田哲学や京都学派などの成果を発信する講座）、②世代別講座（シニアキャンパス、ミドルキャンパス、ユースキャンパス）や本格的なシニアクラス、③年齢に関係なく、短期間（3、6ヶ月、1年）で希望科目を選択でき、図書館が利用できる講座、④分野別（フリータイム）キャンパスの開講、⑤市民参加の特別講座、⑥「何らかの形で独習や自分で研究している人のために研究の助言や発表の支援を行うコースの開設」「研究のしかた（本の検索方法やインターネットの活用など）の講座の開設」など多様なニーズが伺われた。

京都大学では特に、他大学の公開講座や他機関（カルチャーセンター等）との差異化をはかりつつ、「京大ならではの」の独自路線を明確化することが求められており、この意味で、①のような具体的な提起は、示唆に富むものと言えよう。また⑥は、前記の「自学学習者」のための新システムの導入と大きく関わるものである。生涯学習社会の進行とともに、一般市民が、研究者の成果を学ぶだけでは飽きたらず、自ら研究の主体になっていくための「手ほどき」や「サポート」が求めるようになってきたのである。自らが継続的・能動的に取り組んできたことを、自分なりに納得のいく形でまとめ上げたいという熱意と願望をもつによるものと言える。この点への対応も大きな課題である。

その他、新規事業としては、シニアキャンパスの趣旨の一つである「旅と学び」の発想を発展的に展開するようなものが挙げられた。例えば、「京都大学キャンパスツアーの実施（浪人生からシニアまで）」、「京大生一日体験ツアー」「京都文学紀行」（京大とJTBが共同で有料で）、「京都の『地の利』を活かしたフィールドワーク」などである。

既存の事業の改編・拡大については、シニアキャンパスの継続をはじめ、公開講座の充実（学術的な高度な内容・文化教養・趣味・フィールドワーク、高齢社会に対応できるシンポジ

## シニアキャンパス報告

ウム・パネルディスカッション)、聴講生制度のアピールと情報公開、科目等履修生制度の拡大、平常授業への中高年者の参加、コースを段階ごとにモジュール化、コンパクト化し、年度途中でも入りやすくすること、などが提案された。

最後に、大学施設の開放に関しては、キャンパス設備(図書館・博物館など)を有料で開放すること、夏休みに学生寮を使った宿泊施設とセットのサマーコースを開設すること、定期的に市民にフリーマーケットのスペースを無料で提供すること、などが挙げられた。

### c. シニアキャンパスの成果と今後の課題

#### ① シニアキャンパス参加の感想

総じて、以下のように肯定的なものが多かった。

\* 今回のシニアキャンパスは、中高年を対象に、他大学の行っている従来のカルチャーセンター的なものとは異なり、大学生活の一端を経験し、大学の雰囲気を楽しむなど、新しくユニークで、画期的な試みであった。

\* 大変感激しました。学びたいと思う方々と若い方たちの巡り合わせも大切にしていきたいと思います。……予算がなければ徴収してもいいのではありませんか。

\* 学ぶ楽しさを実感することが出来た。その学びをもとに、知識の輪が広がる喜びがあった。……3日間の京都大学での「まなび」であるが、自分が活動したい福祉の分野についても、「機会があれば、開かれたキャンパスで学びたい」という、前向きな考えが芽生えた。

その一方、「京都大学」に「知の最先端」であることを何よりも期待する参加者にとっては、「京都大学について学ぶ」という今回の設定は、大きな欲求不満を抱かせるものだったようである。このような参加者の学習ニーズの幅広さと高度化こそが、今のシニア世代の特徴であるといえるかもしれない。

\* 今回日程をやりくりして、期待して行きました。しかし、受講者が中高年対象と言うことで、高齢者で頭脳レベルも低下していると想定されて、老人大学や公民館のサークルくらいに気楽に考えておられたようで、正直なところ物足りなくて期待はずれでした。カルチャー・センターよりレベルの高い講義を期待して、はるばる遠方から参加された事だと思います。すべての講義題目に「京都大学」がついていたのですが、受講者は「京都大学について学びたいのではなくて、「京都大学の教授」の講義をお聞きしたいと思って参加しているので、無理矢理京都大学と関連づけなくても、素直に、講師の先生方のご専門分野のテーマをわかりやすくお話しして頂ければ良かったと思います。

② シニアキャンパスの「今後」についての意見

シニアキャンパスの評価が総じて高かった反面、そこでの物的・人的負担が大きかったことも、参加者には認識されている。この意味で、事業としての持続可能性については、疑問が持たれる結果になっている。今回はむしろ「実験の一つであり、社会へのアピールの一つとして位置づけておられる」とする、以下の推察はある意味で、妥当なものであろう。今後はむしろ、今回の趣旨を、今後どのような形でいかに発展させ、具体的な取り組みにつなげていけるかが、問われてくるものと考ええる。

- \* 国立大学という壁を乗り越えた先進的な試みとして高く評価されるべきと考える。各講師の充実した講義内容、中高年を配慮した適切な時間配分、行き届いたサポート体制などで、参加者の満足度も高かったことと思う。総長、副学長が応援されたことで、この講座に対する大学のあつい意気込みも感じられた。しかし、独立行政法人として財的、人的資源のすべてが厳しい状況に置かれている国立大学が「大学を社会に開くために」、このような贅沢な講座を今後も数多く開催できるのだろうか、とかすかな疑問を抱いた。多分、これは実験の一つであり、社会へのアピールの一つとして位置づけておられると推察している。
- \* 生涯学習社会を「いつでも、どこでも、だれでも」が参加できる学習の保障と捉えるならば、「いつでも、どこの大学でも、無理をせずに」開講できるシステム作りのためには、あまりにも力が入りすぎ、長続きしないのではないかと心配されるほど充実したものであった。着想の見事さと周囲の協力体制、スタッフ全員の意欲が感じられるだけに、「もう一度やりたいが……」と望まれたときに、果たして実現できるかどうか疑問である。

③ 具体的な改善点と要望

特に多かったのは、スケジュールについて、他の参加者との交流の時間がもっと欲しかったというものである（「もっと全体の自己紹介タイムが欲しかった」「自己紹介や交流の時間をもうけて頂けると嬉しいです」「『ゼミ』にもっと長い時間をとって欲しい」など）。また「夕食会・懇親会は希望者のみならず、プログラムに組み込まれていたらよかった」や「きょうだいは別のグループにして欲しい」という声も、他の参加者とより多く知り合いたかった、話し合いたかったという気持ちの表れとも読みとれる。他には（「すべての講義に簡単なものでも、レジュメを配ってもらえると良かった」との声もあった。

「次回」があるとしたら期待するものとしては、本学生と一緒に講義を受講すること、サークル体験、学内のイベントへの参加、ゼミ体験、学生との意見交換、ディスカッション、単位取得などが挙げられている。さらに、「今後、より期待されること」として、テーマを「京都大学」に限定せず、「背景となっている京都という土地柄と歴史を背景にして、独自の「京都学」とも言うべき分野に発展していくこと」という提案もあった。

（渡邊）